

基督傳

の辞令として之を用ひたるか、親み易き天性より無意に出でたる言あるか、將た善き師なる一語の裡に含蓄せらるべき本意を解取したる上にて之を言ふか如何に。後世基督敎の辯証家が好むて用ゆる雙關論法の「キリストは神なり神にあらざらんば善人にもあらず」と云ふ如き人、或は斯かる殺すか癒すかの極端の論法は之を用ひざるを可とす。云へども、キリスト自らも此種の論理を使用したり。此青年の思は敬意の乏しきにあらずして淺薄なるにあれば先づ手強く之を揉みこみ、要す。乃ち曰く「一個の外に善き者なし、其一個とは即ち神あり。我果して善ならば亦神なり。兩者の中間あるを得ず」。而して更に歩を進めて曰く「汝若し生命に入らんと欲せば誠を守るべし」。青年は此答を得て大なる失望に打たれたり。之よりも新奇にして大なる事を聞くを得んと期して來りしに計らざりき依然たる舊格を履むとを教へられんとは誠を守れと云ふか、我は幼時より之を遵奉して今日に至れり。この新しき教師にして之よりも以上に授くべき事を有せざるか。然りイエスは以上のものを有したり。即ち曰く「行きて汝の有てる物を賣りて貧者に施せ。然して

基督傳

來りて我に従へ」。青年は殘る方なく誠を守れりと待みしに、今茲に一個の誠を示さるゝに逢ひて忽ち挫折したり。主は我の肺腑に進入し其處に財神の恐ろしき偶像の安置せらるゝを發見したるなり。青年は之に堪ゆる能はずして辭し去りぬ。キリストは何が故に斯の如き非常なる要求を課したるか。固よりキリストを信する者は皆必ず産を擲つべしとの意にはあらざるべし。之を論ずるに當り先づキリストが人を見るの眼識に原きて考へざるべからず。キリストは此の青年の心の底を搜りて彼が依りて立つ所は一に唯富なるを見たり。然して救拯てふことは人の靈魂がキリストに依りて立つに至らしむる謂なりとせば、其他の支柱をば犠牲として取り去るをも忍ばざるべからず。今此人とても富を以て永生を買ひ得べしと信するほどの愚物にあらざり。又富を以て人に誇示するほどの俗物にもあらず。之よりも上品なる性情を具へたり。さればこそイエスは一見之を愛したるなれ。然れども歸する所彼の幸福の主なる要素は唯富にてありき。彼の幸福とこの根底との中間には種々なる物の介するありて、金即ち幸福の根底なりとは自らも知らざりし

ならん。然れども眞相は是なりき。一朝富を奪ひ去りたらば、彼が一生の満足も幸福も愛嬌も興に消失したるあらん。

我ど我がキリストに信依する精神との間に蟠りて兩々徑に相照す能はざらしむるものは何ぞや、これ我等が油断なく又分明に審査するを要する問題なり。我等にして速に之を断ずる能はずして過ぐるならば、キリスト我等の爲に之を断ずる時來らん。友に離れ戀人を喪ひ或は家政の傾く等の不幸に逢ふて初めてキリストに依ることを致へられんとす。青年の受けし試験は嚴格なりき。されども是にあらざれば試験の効力なきを如何にせん。彼は爰に至りて以爲らく、我は黄金を擲ちてまでも十字架を負ふ能はず、死するが爲にエルサレムに上るとせば、我は行く能はずと。彼は憂色面に表れて去りぬ。彼は此後再びキリストの許に來りしことありしか。知るを得ず。彼はキリストに愛せられ、其去るや又心無く去りしにあらざれば、或は復歸り來りしやも知るべからず。然かありしことを望むあり。彼若し遂には幸にして救はれたりとするも、兎に角爰に於て再び遭ひ難き一大機會を失ひたるなり。彼は

基督の傳

基督の傳

悲むで去りぬ。キリストも亦悲に満ちて之と別れぬ。然らずば如何ぞ下の如き沈鬱ある語調。キリストの口より漏るべきや、『財を恃む者の神の國に入るは如何に難きかな。富める者の神の國に入るよりは、駱駝の孔を穿るは却て易し』と。光と生命を離れて遠かり行く青年の後影をばイエスは如何なる愛惜を含みて見送りしぞ。人は失望したる質問者の悲を語ると雖も、想へ棄てられし師の悲は果して如何なりしか。何の悲を以てか之に比ぶべき。彼が運命定まれるエルサレムを望むで泣きたりしと、全一の苦痛胸を打ちし也。

是に就きて二三の教訓を學ばしめよ。先づ云はんとする所は陳き教訓にして又幾度か反復して飽かざるものなり。即ち一個人の靈魂の尊貴あることなり。キリストの最も大なる言は一個人に向ふて語られ、最も大なる喜は一個人の身に關しての喜なりき。一人悔ひ改めなば天使の前に歡喜ありと云へり。一個の靈魂を救ふ爲めに神の全力を用ゆるに値するならば、況んや我等の力を以てするをや。人の靈魂

基督傳

を救ふは我が生涯の冠冕たるに十分なる光榮の事業なり又一人の靈魂の救はれたるごとが如何に大なる結果を生ずる端緒となるや未だ知るべからず一人を救ふは即ち全世界を救ふ所以にあらざるを知らんやこの結果を見るを得ると見得ざるに關せず又結果を精算し得ると得ざるに關せず一個の靈魂の爲には全力を用ゆべく又滿幅の喜を感じべきことを確信するなり

次に注意すべきことはキリストは世俗的の意義にて己を利すべき種類の人を收攬せんと試みざりしことなり彼は又品價無き手段を用ひて味方を作ることをなさいりきサマリヤの婦との對談はキリストの名を損するの恐なきにあらざるに反して富める青年を門下に致すを得ば益少からざりしならん弟子等は前にはキリストが彼の婦と語るを辭せざるに驚き今は又富める青年を去らしめしを見て益々驚き是の如くならば誰か能く救はるゝを得べきやと問ひたり然れどもキリストは世俗的の手段を用ひて門徒を收むるを屑とせず赤心を以て來らざるものを招集するを好まず彼の成敗は數を以て量るべき種類にあらざる旗幟の下に大衆

基督傳

の聚まり來るを見るは愉快ならざるにあらざると雖も質は量よりも貴しキリストの許に集まる人は確乎たる精神の人にて窄き門より入りキリストに依るが爲には他に依る所を捨つるを辭せざるの覺悟ある人にてあらざるべからず此の門は財産てふ重荷を負ひながらに青年を容るべきは必に廣濶ならず唯精神の之を潜るを許せしが故にこの青年は門外に遺されたりき

罪必ずしも門を杜ぐにあらざり道德必ずしも之を開くにあらざり故にサマリヤの婦は富める青年よりも先に門に入り税吏娼妓はパリサイ人に先じて入れり他なし入りし彼等は失意の境遇にありて世に便るべき蔭なきなり一心にキリストに依り頼みしが故なり青年は身分あり富あり偏に此等に依りて自ら立つを得るの自信も亦くさりとて之を擲ちてキリストに就くの冒險を試みることを能はず遂に門外に閉ぢ出だされぬ之に反してサマリヤの婦は非ある人不幸なる人に向いて開かれたる門より入りぬ人の子は失はれたる者を尋ねて救はん爲に來りたればなり

第十二章 基督と敵人との應對

兩刃の利劍其口より出てたり

基督傳

キリスト防禦の地に立ちし時の態度を觀るにあらざるば未だ十分に彼を揣り知る能はず。彼が敵に對せし道如何キリストが敵として對せし人は當時國中にて最も機慧の才智を以て推さるゝ人にして、キリストは之に反して外面は一個の貧なる野人にして修學の機をも得ざりし人あり。キリスト準備して後語る時は良く語りしことは我等の既に知る所なるが、不意の攻撃に當らざるを得ざる時其の應對に於て巧拙如何にありしか。この方面を觀んとす。

一日の中種々なる種類の敵交々來りてキリストに攻撃を試みしことあり。眞先に來りしは長老と祭司にして、キリストに問ふに彼の所行は何の權威に原づくかを

基督傳

以てせり。敵の計略はキリストが如何なる答辯を爲すにせよ之を捉へて雙關の内
に追究せんとせしなり。キリストは之に答へず先づ反問を提起して曰く「ヨハネの
洗禮は天より出でしか人より出でしか」と。敵は忽ちたぢるけり。若しヨハネの洗禮
が天より出でしと答へん乎、ヨハネはキリストの爲に立証したる人なれば、これ即
ちキリストの名分を是認すると同じからん。左れば然らずと答ふれば、ヨハネを尊
信して預言者となせる民衆の意に逆ふ恐あり。是に於て彼等は怯懦なる無言の裡
に遁竄して「知らず」と答へたり。イエスは即ち曰く「我も何の權威に憑りて之を爲す
か汝等に語らず」。初めて之を見ればキリストは此時何が故に自己の權威の出處
に就きて明瞭なる答を與へざりしかと疑はる。問ふ者は國民の治者の地位に立ち
しかば斯る詮議を遂ぐるは職分上正當なるにあらざるや。然るに之に對するキリ
ストの答を見るに好んで鋒先を避くるが如く好意と弘量とを欠くが如きは、何故ぞ
や。この種の疑團は一局部の問題なれども、亦大体の主義に亘ることなるが故に、能
く之を解釋するを求めなば、堅岩の中より貴金を採るが如く大に學ぶ所あらん。

基督傳

先づキリストが斯の如き答を爲せし理由は質問の不正直なるに存す。キリストは質問の仮面を剥ぎ去りて問ふ者をして自ら其間の真相を發き出だし、彼等をして不正直なる心より發したる質問は答を受くる價格なきを知らしめんとす。キリストの態度は問ふ者の態度に應じて定まるなり。彼等は知識的の困難に惑へるが如く稱すれども其實困難は自家の道徳に存するなり。此時に於ても彼等は先づ一個の決論を斷定しキリストは決して天より出でしにあらざる、其答にして先入の意見を立て、後問を發せり。縱令彼等に答を供すとも其答にして先入の決論と一致せざる間は之を容る、餘地あらざるなり。今日に於ても我は公平に宗教の問題を研究せんとすと稱する者にて、内心には我決して陳腐なるクリスチャンとならずとの決意あるなり。斯る人に向ひてキリストの口は開かれず。

彼等は全然答を與へられざるにあらざる一部分は與へられたるに之に意を用ひざるが故に、其上の解答を受くるを許されざるなり。光は與へられたるに彼等は之を拒みたり。有てる者は猶多く與へらるるとは万般の事に適用せらるべき真理にして、

基督傳

基督の光を求むるの道もこの外に出でず。キリストの光は遍く照るが故にこの光の一線にても之を追ふて尋ね入る者は必ずや光の發射する大本に到着すべし。自ら好むで目を蓋ぐ者にあらざるは怯懦にして道に進むの勇氣なき者にあらざるは必ず道を告げられしならん。但彼等は既に受けし光を怠り之を斥けたるが故に、以上の光は與へられざりしなり。犬に聖き物は與へられず、豚の前に眞珠は投げ與へられず。

又彼等は單に知識上の質問者なり。自己の精神に渴望ありキリストに依りて之を醫されんことを求むる如き心は毫もこれなし。彼等の來るは口舌を弄せんが爲なるのみ。罪人たるを感じキリストの愛と赦を得んが爲にあらざる。利口なる代言人が証人を辯駁せんとするが如き心を以てキリストに來るも何の益あるべき。

先に問ひし者の敗北に懲りずして次に來りしはパリサイ黨とヘロデ黨に屬する人なり。ヘロデ黨とは如何ある種類の人なるやを詳にするを得ず、其名によりてヘ

ロデ一門の權勢に資縁せし人たるを知るべきのみ。彼等問ふて曰く「貢税を羅馬の皇帝に納むるの可否如何」。此れ實際の問題にして形の上より見れば然るべき質問なり。ヘロデ家に忠なると外國人の政治に服従すると兩立し得べきやこれヘロデ黨の疑惑せし所あるべく、又パリサイ黨に取りては一の良心問題なりしからん。夫れ羅馬の皇帝はイスラエル國民の仇敵にあらすや、怨重なるパピロンも管ならざる七丘の都に位を占め、傲然として神の撰民の頭に蹠を加へ、鷲章の旗はエルサレムの神殿の上に翻れり。アブラハム、イサク、ヤコブの後裔たる者にしてこの汚らはしき専制者を君として仰ぐ可きや。これパリサイ人の問にして愛國の誠より出でたるに似たり。然れども實は然らず。平素相反目せる兩黨がともにキリストを惡む心の一あるを縁として相結び、キリストの自尊心を挑して之を拵さんどす。彼若し然り貢税を納べしと答ふれば、憶病者の不面目を被ひりて國民の主導者たるの機會を失ふべく、若し又否と答ふれば、羅馬の官吏は直に彼を捕縛して處刑すべし。

キリストは正面より之に答へずして、彼等に「デナリ」の一片を出ださしめたり。デナリとは當時の通用銀貨にして其面には嚴刻殘忍深沈なる羅馬帝デベリオの顔を鑄たる物あり。イエスは之を指して曰く「皇帝には皇帝の物を納めよ」。表銘は所有權を表章せり。人民の生活を支配する權を有し人は之に對して當然の分を盡さざるを得ざる一定の政府の威力を表章せり。イエスはデベリオ帝其人に神權あるを認めしにあらざるも、法律と秩序には神權あるを示したり。然る後イエスは一步を進めて教訓と叱責を兼ねたる意味深き一語を加へて曰く「神には神の物を納めよ」。神に對する義務は杯盤を清潔にする等の末節に止まらずして一層高く進まざるべからず。貨幣の面に帝王の像の銘せらるゝ如く神の像は汝の心に銘せらるゝにあらすや。彼等が喋々する問題は彼等が不問に付せる問題に比すれば至つて瑣小なる問題なり。心魂を打ち込むべき大問題を避け好むで輕薄ある問題に醜觀たるは人間の病なり。神に屬ける物を以て神に事ふべし。貨幣の銘は銷磨するとあるも、人心に銘せられし神の像は歴然たるにあらすや。汝は汝の所有にあらざるなりと。

基 督 傳

第三に來りし敵はサドカイ黨の人なり。彼等は此こそイエスを苦むるに足るべき難問なりと思ひ、七人の兄弟に相次ぎて婚したる婦人は復活すれば誰の妻たるべきや」と問へり。これ必ずしも有り得ざる場合にあらす、この問を案出せし人は問の妙あるを自ら得意とせしならん。然れども彼等も亦敗北せり。キリストは他の難者を待ちしと全しく、其間に根本的の誤謬あるを示したり。曰く「復活したる者は娶らす又嫁かず天にある神の使の如し」然して舊約書中に神をアブラハムの神イサクの神ヤコブの神と稱したる事實を引きて、世に在らざる列祖も神に取りては猶ほ活ける人あるを論じ、來世を信せざるサドカイ人の謬見を排したり。説く所必ずしも創新なる真理にあらす、舊來の啓示の裡に如何ばかり人の注意せざる寶を含めるかを示したり。

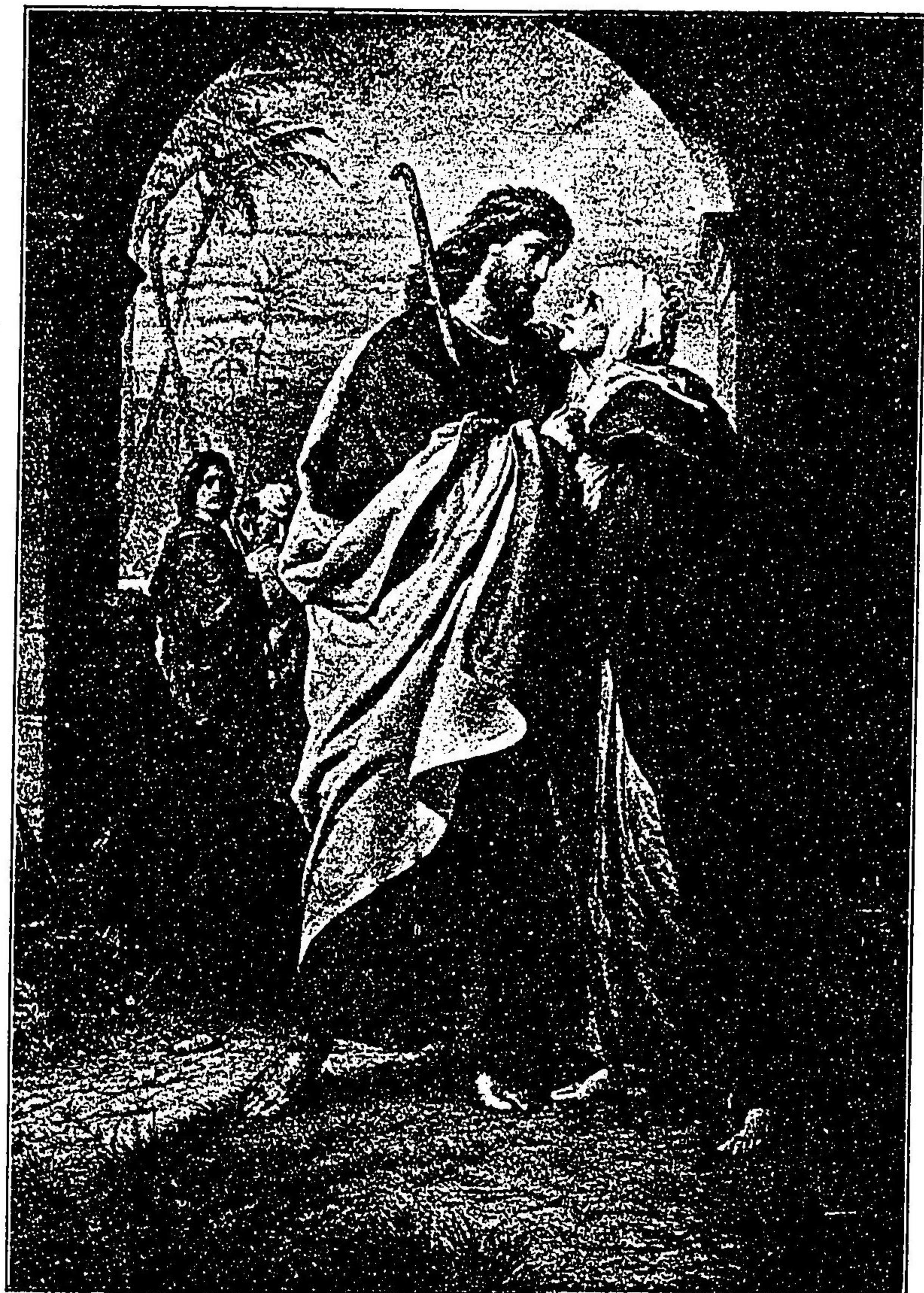
一人の教法師傍より始終の事を観てありしが、他の交々敗れ退くを見て見、此人々は律法に暗き故に脆くも敗れ取りたるなれ、我には彼等が未だ知らざる縦横の辨難

基 督 傳

法ありいでや之を試みん」と思ひしにや、鋒を交へんとして現たり。問ふて曰く「律法の中にいづれか重大なる誠なるや」雷の如き答は立處に彼をして屏息せしめり。「汝心を盡し精神を盡し意を盡して主なる汝の神を愛すべし。これ第一にして大なる誠なり、第二も亦之に全しく己の如く汝の鄰人を愛すべし」。一語答へ得て復遺憾なし。

管に以上の如き討論のみならず、キリストは敵の言に因みて最も深遠なる教を垂れしことあり。パリサイ党と學者が此人は罪人を受けて食を偕にすと私語するを聽きてキリストは迷へる羊、失はれし銀錢、放蕩兒の最も美妙なる譬喩を物語れり。放蕩兒の話に次ぎて人に親まるゝ善きサムリア人の話も亦、或教師が立ちて彼を問ひ試みたるに縁りて語られぬ。

此種の例は猶多く擧げられ得べし。見るべしキリストの心は之を引き出だすこと多きに隨ひて益々蓄ふる所の富贍なるを、咄嗟の間の應對に於て最も其大なるを



現せり。想へ敵は一國の智者にして幼時より討論の術を習ひたる人あり。此は唯一
個の貧しき木匠にして未だ曾て學校に學びしことあらず。作事場を出で、より日
猶ほ淺き人なり。何者か彼を教へて斯る勁敵とならしめしや。何處より此知慧を得
來りしや。一度も論争の場に敗れ取りしことなき秘訣何處に存するや。人の憤怒却
て彼を頌讚するの機會を作り、異宗の人彼が爲に喇叭を鳴らす。これ何によりて然
るや。神にあらずんば誰か此事を傲し得べきぞ。

第十三章 多忙なる勤勞

晝の間は我必ず我を遣し、者の業を爲すべき
なり夜來らん其時誰も業を爲すこと能はず

此章に於てはキリストが傳道の月日を如何に費せしかの一斑を語らんとす。爲したる事を記するに先ち堪へたる事を記せしめよ。キリスト一生の辛苦艱難は之を一面より見れば孤立特別なりと雖も他の一面より云へば凡そ世に於て高尚なる生涯を送る人物の經驗する苦痛と類を同くする者なり。キリストは徹頭徹尾苦痛に耐へし人なり。人間の罪に代りて刑罰の苦き杯を飲みたる其深義の苦痛に於てのみならず日々の生活渾て是れ苦心慘愴の生活なり。身は誹謗冷遇の空氣に圍繞せられ骨肉の親にすら其心事を諒せられず三十年間の深き情縁をば道の爲に

斷たざるを得ず。日夜起居を借にして心を知ること最も多かるべし。弟子にさへ誤解せらるゝを忍ばざるを得ず。外にはパリサイの人が耽々たる注視を以て隙を覗ふあり。世に宗教家が自黨の教義の倒されんことを恐るゝより生ずる怨憎の念はと恐ろしきものならず。一言として曲解せられざるなく、一行として邪推せられざるなく、偏に我を陥るゝ材料を獲んと欲す。斯の如き憎惡の間に立ちて何人か苦痛を感ぜざらん。殊に罪無きキリストに於ては其苦痛は我等よりも鋭からざるを得ず。我等は自ら欠點あるを知るが故に他人の我に加ふる批評不當あるものあればも中には當れるものもあるを知り稍之れを忍ぶことを得。獨りキリストに於ては此あるを得ず。彼は又何人をも愛し何人をも賤まざるが故に人より受くる批評の痛を感ずること鋭敏なり。彼は又彼を傷けんとするものたゞ刺ある鞭を蹴る如く自ら破滅を招くに過ぎざるを知れり。此等の事は皆彼の苦痛を深くしたり。然れどもキリストは能く罪人の反抗を忍受したり。其忍耐はストイックの如き心を以てするに非ず。初の目的を操持して終始之を易ざりし意なり。己が立つ可き處

には安んじて立ち取る可き道を見ること明にして百難を排してこの道を逐ふて進みたり。人は動もすればキリストの有したる此の堅忍不拔の大精神を觀過さん。とす。これ畢竟彼の目的が片時も動搖せざりしが故なり。彼若し常人の如く精神に弛張低昂の波瀾あらしめば却て平生の志の堅固なるを映出せしならんに、恒に有る者は人の注意すること少し。然れども猶他の理由とすべきは、キリストがこの精神を非常なる温和の底に包みたる故に容易に之を見るべからざるることなり。天鵝絨の手套を着くるとも、鍔手は依然として鍔手なり。キリストは八方より批評、憎惡、反抗を受くるも悠然として驚かず、自若として終まで歩むべき道を歩みたり。以上はキリストが忍受せし方なるが彼は又勞力せり。日として勞せざる日は無く、勞して効なきことあかりき。其の傳道の初期に於ける一日の記録を讀ま、其一生の多事なりし一斑を想像するに足らん。或日彼はゲネサレ湖の東岸より歸り來りカペナウンにて一日を過したり。カペナウンは湖水に臨み、岩を積み成せる地盤に建てられ、其頃は繁華なる都會にしてイエスは暫く此處に住居を定めり。其朝と

傳 督 基

なればイエスの歸宅を迎へんとて鄰人多く音づれ來りぬ。イエスの住ひたる程度の家屋には二階の廣間ありて祈禱若くは集會の用に供せらるゝを常とせり。鄰人の來り集りしは此室なりしからん。折しも猶他に彼を煩すべき事起りたり。思ひがけなく一人の病者は屋根より釣り下されて彼の前に横へられたり。この病人は蓋し善からざる生活をなせし人なるべし。今や癱瘋の病に罹りて生活はうら枯れ。今や最期も近からんとす。但罪惡の果てにも彼を棄てざる四人の良友ありて、此人々は友を思ふ深切の餘り屋根の瓦を取り外して病人を釣り下したるなり。病める者は朋友の情は嬉しく感じながら我身には最早望の少きを悲みてありしならん。イエスは其の不言の中情を觀て取りしにや、深切に其の顔を見下して「子よ心安かれ汝の罪赦されたり」と云へり。其席にはイエスの名分如何を檢せんとして來りたる教師もありけるが、今イエスが罪を赦すの權を有せるを以て自ら任ずるを聞きて思へらくこれ神を瀆す言あり。神にあらすして誰か罪を赦すの權を有せんや。彼等が未だ口に出ださざる疑問に答へてイエスは實力ある證據を與へ、病者を癒し

傳 督 基

て其言の權威を證明したり。彼等が口を以て汝の罪赦されたりと云ふは易々たるのみと思へるに對し、云ひ得るのみならず又行ひ得ることを示したり。少時の後イエスは家を出で群集之に隨ひて行きしが、税關にレビといへる人の坐し居るを見たり。此はこの港に入り來る船や又この町を過ぐる隊商より關稅を徵せん爲なり。税吏と云へば羅馬人に使役せらるゝ故に國人よりは甚しく擯斥せられたり。レビが是の如き處に座するを見るは知人の深く悲む所にして、彼は之が爲に會堂より放逐せられ、同胞國人との交は全く斷えたり。イエスは此の人に目を注ぎて「我に従へ」と云ひしに、税吏は直に立ちて從ひぬ。レビは此日舊來の生活を棄て、神の賜(マタイ)てふ新しき名を與へられてイエスキリストの弟子となりぬ。マタイが召されてキリストの弟子となるを見て、彼と同じ職業の者も其他の人も皆異常の感起さるはなかりき。税吏なりし人を撰んで弟子となせば世人の誤解を招き易きは固より覺悟する所なれども、イエスは是の如き得失の算に拘泥するこ

イエスはマタイを召して後出で、人を教へぬ其時何を教へしか言は今に傳はらず。教を宣べたる昔の跡は今も猶ほ尋ね得べしと雖も、失はれし言は何の日に世に回るべき。獨り天上にては、之を聽きて信じたる人々が唱ふある讚美の曲に綴られて永に遺るらん。

其夕はマタイの家に招かれて夕餉の席に就きぬ。税吏と罪ある人多く其席に列りたり。マタイはイエスが此等の人々と相會するを喜ぶべきを察して斯く計ひしは、良くイエスの心を知る者と云ふべし。招く者は故舊に篤き情誼を表し、招を受けし者は又別れんとする友に對する好意を表して來れり。マタイの家は手廣く又淨麗にして多數の賓客を待つに足りしなるべし。イエスは深く今夕の饗宴を樂むで酒興溢るゝばかりなり。然るにパリサイの人は批評せん爲に此席にも入り來りて議論は始されり。席上の談論の一部は聖書に記されたり。彼等は先づイエスに向ひて、ヨハネの弟子は斷食するにイエスの弟子は之をなさないは何の故あるやを問ひぬ。イエスは意深く情厚き言を以て之に答へて曰く、彼の王國は喜の王國なり。彼が

基 督 傳

基 督 傳

弟子を遣して去るの時とならば弟子は悲むで斷食すべきも、今は師弟相偕に在りて説く所は愛でたき音信なれば、如何に喜ばざるを得んや。新郎新婦偕に在る時誰か哀傷する者あらんと。彼は又舊き布と新き布の譬喩、酒と革袋の譬喩を語りたり。舊き布は新しき布と縫ひ合し得べきにあらず。新酒は舊き革袋に盛るに堪へず。左れど又古酒には一種柔なる味あれば古酒を好む人あるも理なきにあらず。此の席上に於てはイエスは光明快活なる氣象に充ちたるを想ひ見るべし。彼は今最も居るを好みたる處に居りたればなり。醫者病人の間に在り、此處ぞ彼が最心安く感

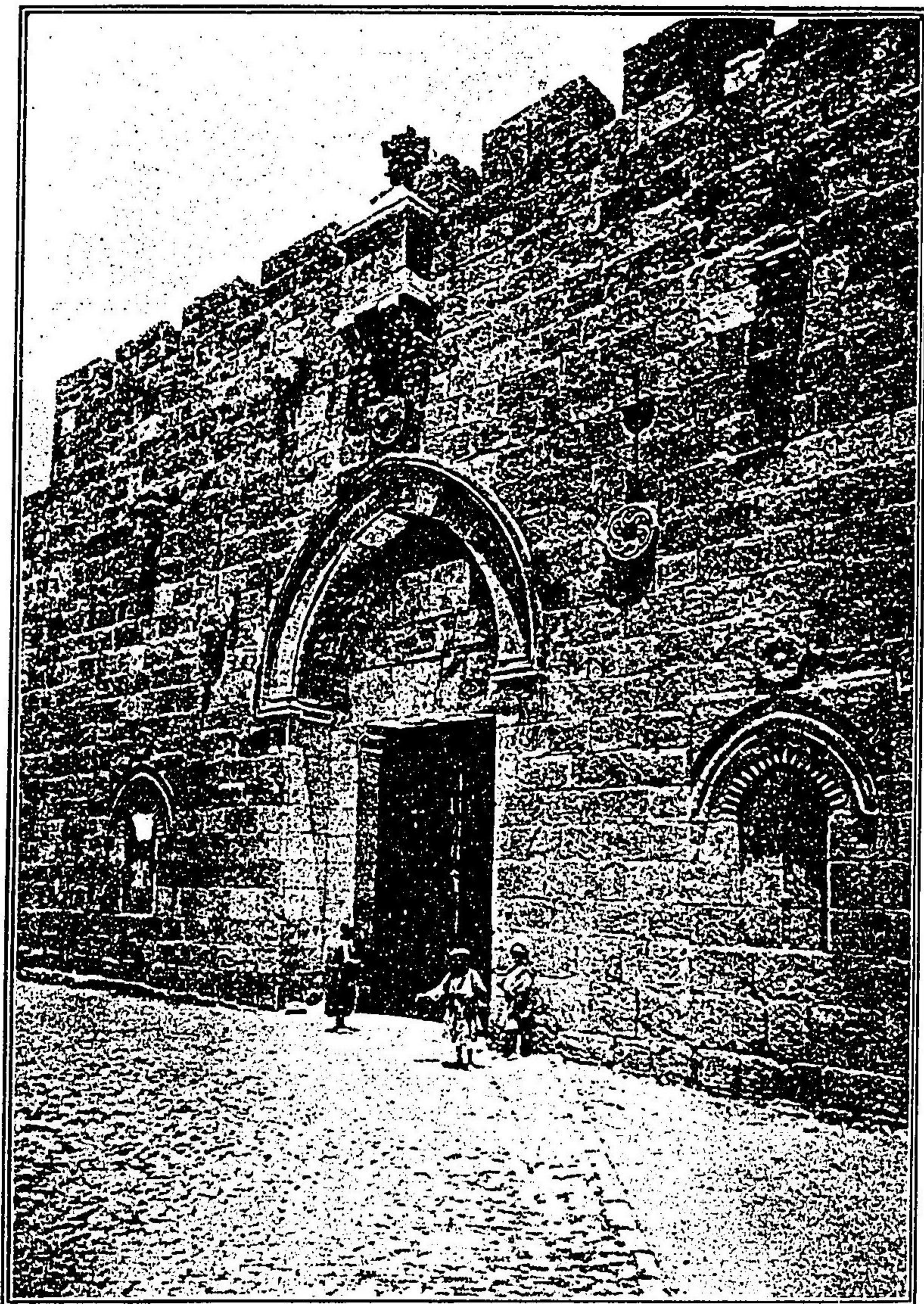
じたる處なり。折しも突然この席に入り來る者あり。其人は會堂を監理せる宰にてヤイコと云ひこの一邑にては第一流の人あり。マタイが税吏となりし故を以て四十度に一を減じたる鞭を加へて之を會堂より放逐したるはこの宰なりしや。知るべからず。兎に角彼はマタイの如き者の家に足を入れるべき人にあらず。然るを何の用ありて此處に來れる。彼に愛する女あり。今年は東方にては成女の齡なる十二歳になれるが今

や重病に罹りて命危からんとす。イエスはヤイロの請に従ひ打連れて早や暮れかゝりたる街を歩み行きぬ。途中にてイエスは復もや一人の病める婦の爲に歩を停られぬ。此婦は十二年間―正にヤイロの女の生れたる頃より血漏の病に罹り治癒の爲に産を蕩したれども聊も効驗見えずして病は重なるのみなりき。此病は不潔なる病として忌まれ離婚の理由となるべき病なり。今此婦は頭へる指もて窃にイエスの衣の裾に觸れぬ。力はイエスの身より傳はりぬ。イエスは見回して誰か我に觸れしやを問ひ婦をして爲せし始末を白状せしめたる後、「汝の信仰汝を救へり安全にして往け」との語を以て送り歸しぬ。斯る中ヤイロは時の移るに心躁ち女は最早絆切れたるにあらずやと氣遣ひつゝ、イエスと俱に門口に歸り着けば慟哭の聲外に聞こえぬ。女は死したるなり。然れどもイエスは「女は死ぬるにあらず寢ねたるのみ」と云ひて室に入り女の手を執りて蘇生せしめ、之を兩親に付し、温然たる態度と細續なる注意を以て食物を與ふべきことを命じたり。斯くまで繁劇ある一日なりしに猶ほ足らずやありけん、二人の盲者路に叫んで曰

く「タビデの子よ我等を憫み給へ」。彼等は叫びつゝ、後を追ひ來りたれどイエスは耳に入れざりければ遂に「主よ我等を憫み給へ」と絶叫し初めたり。帝王に對してすら用ひざる稱呼を用ゆる信仰の大なるを見てイエスは答へて曰く「汝の信する如く汝になれかし」。即ち彼等の目は開けぬ。之よりイエスは家に歸りしに惡鬼に憑かれたる嘔者を携へ來りければ鬼を逐ひ出だし嘔者言ひ初めぬ。

イエス生涯の一日は斯の如くして暮らされしが當に此一日のみにあらずして其一生は大抵之と同じき多忙の裡に費されぬ。其煩勞劇しくして精力は盡きんとす。然れども他人を助けん爲には身軀の疲勞を忘れ、間斷無く彼れを煩し來る請求哀願妨害をば堪へたる忍耐論に驚くべし。イエスは事業を爲さん爲に急ぎたり。日暮の傾くを見て「晝の間は我必ず我を遣し、者の行を爲すべきなり。夜來らん其時誰も行を爲すこと能はず」と云へり。彼の一生は猛く燃ゆる火の如くなりしは怪むに足らず。

イエスの一生は是の如く活動的なる一生なり。左れど最も見るべき所は活動にあ



らず又靜思にもあらず。靜思と活動を和合するの道を得たるにあり。彼は人世の險
 難なる事業に當り苦辛を忍ぶ間にも常に神の現存に包まれたり。身邊に蟬集し來
 る千百の苦心も束の間も彼の心を天父より離れしむるに足らず。我等は深き宗教
 心を以て繁劇なる人生の現實に觸しむる能はず。實際的人は又靜思祈禱を忽に
 するが爲に精神乏しく固定せんとす。兩者の和合宜しきを得て遺憾無きは獨りキ
 リストに於て之を見る。斯の如く活動して倦まず又斯の如く斷えざる源泉を掬み
 し生涯は何處にか在る。彼は人より多く人生の活動に與りたるも其身は依然とし
 て天に在る神の子なり。此の天の背景を除去して彼を思ふこと能はず。

第十四章 基督の變貌

彼は父なる神より尊貴と榮光を受けたり

キリストの一生には三個の頂點ありと云ふを得べし。誘惑と變貌とゲツセマリの
大苦悶是れなり。就中變貌の時は最も重大なる分け目にして譬へば山路の爰に究
りて降り坂となりとす。山嶺に似たり。キリストの神性は爰に到りて最も公明
に發表せられたり。今までは言行の裡に神たる所以を彰せしが今や神たる外容を
以て現れたり。變貌の日に至るまで弟子の信念は漸次に進歩し來りてシモン、ペテ
ロの告白に至りて頂點に達したるが之と同時に敵の疾悪は日に益々劇しきを加
へぬ之より以後兩者に對する趣は前日と異らざるを得ず。故に變貌以前には奇跡
を行ふこと多かりしも以後は特別なる者を除くの外奇跡の數少し。又變貌以前は

公衆に對して自由に説教したれども此の以後は主として弟子のみに語りたり蓋しキリストの言を聞き又奇跡を見て道に歸し得べき種類の人は大抵既に信じたれば行路一轉是よりは山嶺を下りて徐に死てふ暗黒の谷に進み入らんとす。

變貌の日の前後を考ふるに是れ實に非常の時なりしなり彼がエルサレムに於て死すべきことを弟子に告げてより正に八日の後なり此の連絡より推すればこの一場の事がキリストと其弟子に如何の關係あるかを解せられ得べし兩者の關係の中にてキリスト自身との關係最も直接なり第一にキリストは此事によりて將來受んとする榮光の幾分を味ひ知るを得たり彼が山上に於て其貌一變して光明の衣を纏ひ燦然として四圍の暗黒を散らすときこれ決して偶然にあらずして素より着くべき装を著けしなり光は神の衣なり又當に衣なるのみにあらずして内に蓄ふる光の源より自然に發射したるなりモーセがシナイ山を降るとき其顔は光を放ちて自ら知らずステパノ將に死なんとして其顔天使の顔の如くなりしと

云ふ如何ばかり光明静和純潔にてありつらん然れども二人どもに神より流るゝ光榮を映受したるに過ぎず獨り世界の光たるキリストに於ては之と異なり彼は手に光を携へしのみにあらず全身此れ光にして其赫灼たる麗光は我等仰ぎ視るに堪へず。

變貌の時に發したるキリストの榮光は精神の榮光なりキリストの献身の榮光なり。乏しき此世に己を付與したる榮光なり決心燧石の如く百難の路に當るを願うしてエルサレムに向ひたる意志の榮光なり然れども榮光の主なる要素は神性の發現にありと考へざるべからず。

變貌ありしによりキリストは天彼の事業に同情を寄することを確信するを得たり。モーセとエリア現れてイエスがエルサレムにて死を遂ぐべきことを相語れり。夫れキリストが是より成すべき一大事業は死することこれ也死は敢て辞せずと雖もこの事に關して人の同情の薄きは彼が最も心を傷めたる所なり。親しき弟子にさへも婉曲なる言を以て自己の死を暗示せざるを得ず。遂に感情の潮堰を決し

て進り出で初めて胸襟を披くの時を得て、彼が受けんとする大難につき死につき復活につき語り出でし時、嚮に見事なる告白を爲せしペテロまで之を諫止し、數分時の前には巖なりとの稱讃を受けし者今やサタンよど叱責せらる。キリストは自己の死に就きては弟子とだに與に語るに足らざるを知れり。今やモーセ、エリヤと會合して此事を相語り、靜なる知慧と同情の満足を交すことを得しは、イエスの爲に如何に喜ばしかりしぞ。彼等はイエスがエルサレムにて世を去るべきことを相語りしと記されたり。死てふ慘憺たる事實は、世を去るの一語を用ひて包まれ又淨められたり。死畢竟何事ぞ。ただ地のエルサレムを立ち去り天のエルサレムさして行くに過ぎず。モーセとエリヤは安かに世を去りし人なり。美はしき昔譚に依ればモーセは神の唇に接吻せられて死せしと云ふ。モーセは死に至るまで躰健にして視力耗せず元氣旺なりき。エリヤは又火の車に運ばれて上天に朝したり。二人の死どもに斯の如く光榮ありしなれば、キリストの最期は猶更に光榮大なるべし。死は想ふほどに難からず、彼はエルサレムに於て一場の出埃及を爲すに過ぎれば、二

人はイエスを慰めたりとせば、彼等は又イエスに慰められたる事なからんや。彼等の死は安らかなりしと雖も、其生は多難の一生にてありき。モーセは未だ約束の地に入らずして死し、エリヤも亦事業全く勝を制するを見るに達ばずして昇天せり。二人が之が爲に盡瘁しながらも前途を十分に解する能はざりし立法の事業預言の事業どもに畢竟キリストの事業の豫備にてありしこと、此れ即ちキリストが彼等に語り示せしとにあらすや。前人の事業はキリストの事業の光榮により蝕せられず又埋没せられずして却て光を添へられ眞意を發揮せらる。茲に俱に大なる犠牲につき語りし時、彼等はキリストを助けしなるべく、キリスト亦彼等を助けしならん。

キリストは此時に限らず常に天の同情によりて喜びたり。罪人の救はるゝとき、バリスアイの人は盛顔し嘲笑するども天使の間には同情の歡喜あり。音樂あり。此時天より送られてイエスの侶となりしは、天使にはあらで、天使よりも良く彼の悲哀を解し又死の意義を知り得たる人物にてありき。彼等に因りて天の同情は表されぬ。

この同情はイエスに力を與ふるの靈液となれり。且彼は天父の聲を聞きたり曰く「此は我が愛子我が喜ぶ所の者あり」天父の稱讚の聲は如何にキリストの疲れたる精神を喜ばしめ奮興せしめたるか我等は之を測り知るに足らずと雖も彼の一生の回轉機と云ふべき三の時期に必ずこの言ありしを見れば其力如何に大かりしかを領すべし。

以上は變貌の事實とキリストとの關係なり。諸次に弟子との關係如何弟子は先づ之によりてキリストが自己の死と犠牲とに就きて語りしことの確實あるを知るを得たり。彼等は「一たびキリストより之を語られしも解し難きことは遺失し易し。然るに今や天より權威ある命令ありて汝等彼に聽くべし」との聲を聽きたれば、今よりは復之を忘るゝを得んや。此の大命はキリストの弟子に必要ありし所にして又我等にも必要あり。キリストの十字架の下に立ちて幾多の解釋を重ねるとも到底盡り得べからざる深秘は残れり。この幽玄に對しては語る能はず論ずる能はず

基督の傳

基督の傳

又悟る能はず唯信するのみ。キリストは神の愛子なれば我等は唯須く彼に信依し今知らんと欲して知り得ざる秘密も終に彼によりて明にせらるべきを信すべきなり。

弟子は變貌の啓示によりて將に來らんとする大艱難を待つ用の意をなさしめられたり。彼等は今や眼前に顯彰せるキリストの神性を見し上は之より後死の陰死の悲キリストを蔽ふ時も此日の幻影は弟子の眼底に残らざるを得ず又多少残りたり。我等も亦暗黒の境に入らざるを得ざる時には神は之に先ち應時の殊恩を授け以て途中の艱難に堪ゆるを得せしむ。これ多くの人の經驗する所にして或人の如きは神が非凡なる愛を垂るゝを感ずるに逢へば遠からずして艱難の身に來るを覺悟したるは多かり。

且弟子等はキリストの眞の光榮は苦むに存することを知るを要したり。彼等は十字架と聞けば屈辱と失敗とのみ思ひ來りたる故に今この啓現に接して十字架即ち光榮の玉座たることを致へられざるべからず。負くるは勝つの道たるの深義を

教へられざるべからず。弟子等が光榮と思ふ所の物はこれ唯外飾に過ぎず、キリスト自ら進んでこの飾を脱却したる後彼の燃ゆる赤心より照り出づる光は彌々明に照り出でぬ。キリストが屈して愛し俯して憐むは最も光榮あり。パウロはキリストの十字架の外に誇るものなしと云ひしが、神は我等をして之をのみ誇りとなさしむ。

此上に弟子はキリストの變貌によりてキリストのみ獨り尊きを學びたり。ペテロはモーセとエリヤの現れたるを見て、キリスト、モーセ、エリヤの爲に三個の盧を作らんことを請へり。彼は未だキリストの偉大は他人の近くことを許さざるを知らず、キリストを以て二人の英雄と同一位に置かんとせり。ペテロの誤謬は正さざるべからず。目を擧ぐればモーセもエリヤも何時しか去りてキリストのみ後に残り。豫備の爲めに在りしものは何時かは消亡すべく、物は亡び人は去りて唯イエスのみ永遠に残るなり。三寸息絶えて世を辭せんとする今はの際には凡ての物消散して眼前に留るは唯イエスの姿のみならん。

傳 督 基

傳 督 基

以上はキリストの變貌に就きて弟子の學ぶべく又我等が學ぶべき教訓の要目なるが、近世の人の傾向は此等の教訓の一部に偏して他に疎なるの弊あり。變貌の山頂を照らして死の間を散らしたる敬仰心の光は多くの人の尙み慕ふ所なれども之に併せて學ぶべき十字架の光榮に至りては尙むを知らざる者あり。然れども恆久にして眞に人を益するの力ある犠牲は、カルバリイ山上の犠牲に發源せざるべからず。何となれば人格ある神の存在を信じ此神はキリストの十字架によりて人間に與へらるることを信するの外、人類を愛する熱誠は何處より發せんや。此の信念なくして人類の不幸を救はんは企つる者は必ず中道にして阻敗せざるを得ず。善なる神我等を助くるにあらずんば、一生の經營も終に隻手を以て大海を汲み乾すに齊しからん。況して自ら爲す事が目的を達するに最も適當なるやを觀ること明ならずして之を爲すに於てをや。又十字架なかりせば何を以て犠牲の動機となすべきや。クリスチャンの精神は勇者の精神なり、人の爲に自己を與ふることを喜

然れども自己を興ふるに足るの眞價ある高尚なる道理なかるべからず。クリスチャンは徒に世俗の物を棄て又は苦痛欠乏を甘受するを以て貴しとせず。之を爲すの價値ありと思ふ事の爲に之を爲すなり。目に見えずと雖も目に見ゆる物を以て代ゆべきはと重大なる物の爲に之を爲すなり。この境界は獨り十字架の上より觀せられ得べし。

キリストは山を下るや否や山上にて受けたる力を用ゆることを需められたり。モ一セ、エリアと借に在りし數時間は天に在るが如く樂しく新しきエルサレムは既に開けし如く思はれけん。然れども罪惡と悲哀の海は物凄まじく山の麓に渦捲けり。其の怒哮は早くもキリストの耳朶を打ちぬ。癩癩の小兒ありて弟子の力にては之を癒す能はずとてイエスの許に携へ來れり。是の如きはイエスが看慣れたる事なれど、此時は變化の急激なりし故に苦痛心を刺したりけん。嘆じて曰く「我何時まで汝等と借に在らんや、何時まで汝等を忍ばんや」と。實に其時長からず、エルサレムは早や近けり。

第十五章 十字架の先見

彼はエルサレムに行くこゝを確に定めたり

人或は思へらく、キリストは其末年に於ては傳道に着手せし頃に比すれば全く別種の人物となれり。初は日光に包まれたる如き和氣霽然たる人たりしに、末路抑塞して氣質幽鬱となり、昔日の歡喜は挫けて唯自ら滅さんとするの一念に驅られたり。斯の如き論を爲す者は未だ福音書を精讀せざる者と云はざるべからず。注意して之を讀む者は十字架の影はキリスト生涯の初より道に横はるを認むるからん。此の影は搖籃の上にはさへ翳し初めて幼年少年の静和なる年月にも離れしことあらず。昔の譚にはキリストは童の時ナザレの作事場にて十字架を造りしことありと云ひ傳ふ。悲劇の巻を讀む者は一朶の黒雲其の發端に浮び初め次第に濃密を

加へて斷末に進むを見るべきが福音書の歴史亦之に相似たり。十字架は開卷よりはの見えて次第に其全体を露出し來るなり。キリストの一生は歩々十字架に進行する生涯なり。

基 督 傳

然らずばキリストが傳道の初期に於て語りたる數個の言をば如何に説明せんとするか。前章に擧げたる如くカナの婚筵に於て發程に臨んで躊躇の意を含める言ありしことは姑く之を措くとするも、『汝等此神殿を毀ち我三日にして之を建つべし』と云ひしは如何なる意ぞ。又ニコデモと對話の中にも『モーセ野に蛇を擧げし如く人の子も擧げらるべし』との言あり。これ彼が僅に救主的事業に着手したる當初にあらずや。此時よりキリストは今日の形勢は我に利ある如く見ゆるとも終局に至り必ず破裂を免れ得ざることを覺悟したりしを知るべし。

キリストはマタイの靈應に招かれて深く樂める時に於て、自身を新郎に譬へ己に別れて弟子の悲む時來るべしと語りたり。斯くて行路漸く終に近づくに隨ひて此の先見は彌々明に且確實になりぬ。友多く離れ去りて敵勢益々猖獗なる時に於て

基 督 傳

是の如き末路を期せしのみにあらず、聲望隆々たる得意の日に於て夙く既に之を期したり。キリストは私に之を弟子に告ぐるに及びては、管漠然たる事實を知らしむるにあらず、死する場所と境遇と方法までも詳にせり。即ち彼が死する處はエルサレムなるべし、古より預言者は都の外に殺されたることなければ、彼は又長老祭司長學者の手にかゝりて苦むべく、然して弟子の一人に賣らるゝより起りて是に至らん。死するとも猶太人が彼を殺さんと欲する時に殺されず必ず踰越節の時を待ちて殺さるべし。踰越節に犠牲とせらるゝ小羊の如くキリストは人類の爲に犠牲となるべければ此節會に殺さるゝは適當なり。又彼は踰越節より脱化して然かも遙に高き饗宴の例を開きて舊來の儀式との連鎖を繋ぐべし。此等の事に加へて

キリストは十字架に懸けられて死すべきことをも知れり。
キリストが此等の事を先見し得たるのみにも非常の事と云はざるべからず。死の日は何人にも來る、或人には間近きこと明なることあり。然れども誰か先づ此運命に遭ふべきかに思ひ至れば種々ある未練と危疑交も生じて安んぜず。之れをキリ

第十五章 十字架の先見
二百四
ストの信念確として搖かず人間以上なる靜平を維持せしに比ぶれば懸隔如何に大なる。曰く「我は異邦人の手に涉され嘲弄せられ鞭たれ唾せられて殺されん」其言何ぞ從容たる。夫れキリストが事業の初期に於て得意あるべき時に於て前途を視ること斯く明なりしは果して何の故あるぞ。人生の冷風逆潮を経歴して後之のらしめば幾分か説明し得らるべけれど、今や新しき大主義を世上に公表せんとしたる當初に於て、斯の如き心情を抱く人誰かある。此等の人は年少く洋々たる希望に満ちて歌ふならん。

世は既に陳き物に倦みたれば

我は新しき聲を與へんとす

美しきこと善きことの半さへ

未だ世に語られざれば

斯くて履むべき行路長く幾度か斷腸の酸苦を嘗めたる末漸く事業の成り難く目的の達し難きを知り初むるならん。獨りイエスキリストは最初より之を知れり。彼

には年少き改革家の珮々たる羽毛を戴き新き甲冑勇ましく兵馬の場に向ふ如き可憐なる自負の態無し。又改革者は己が畢生の經營の果ては死なることを見るに及んでは云ふならん、「我は眞理を主張したる價として今生命を擲たざるを得ず。眞理を主張するどせざるどは世界に至大の關係あり。故に我は黙して生さんよりは語りて死するを取らんとす。我が事業の爲ならば我は喜んで命を授けん」。キリストは之と異あり。彼も眞理を証明せん爲に世に來れり。然れども眞理を証明したる價として是非なく死せしにあらす。自ら欲せば遺憾なく眞理を証明し使命を傳へ且つ一命を全ふすることをも得たるならん。爲し得べくして爲さざりし所以は、死が使命を果たす罰にあらすして死即ち使命の一要素なりしが故なり。死は彼が成すべく來りたる大事業なり、事業の首腦なり。出世の目的を達するに欠くべからざる條件なりき。

イエスキリストは死を先見せしのみならず、死によりて生すべき道徳上心靈上の結果の絶大なるべきを先見したり。彼の顔容は類なきまで傷けられ人は顔をも向

けて去るに至るべきも悲める者は彼を索めて來るべく、世の悲哀罪惡の重荷彼の肩に負はれんとす。キリストの死は創造力ある死なり、之を基礎として教會は建てらるべく、世界の赦罪と清潔と力は皆之に胚胎すべきことは、キリスト自ら明に觀得たり。

幾多の事實は此の精神を見るべきが最も明なるはキリスト最後の晚餐にぞある。キリストは敵人の手に渡さるゝ夕食卓に就き麵包を取り感謝の祈をなして後之を擘きて云ひけるは「取りて食へ是れは汝等の爲に擘かるゝ我が身なり。汝等も斯く行ひて我を憶へよ」。食して後又葡萄酒の杯を舉げて云ひけるは「是れは汝等の爲に流す我が血にして立つる所の新約なり。汝等も斯く行ひて飲む毎に我を憶へよ」。キリストが一種超自然的の先知力ありしは此言に由りても明なり。當時猶太人は人を死刑に處するの權能を有せず、この權能を有せる羅馬人に對してキリストは怨を買ふの理由なければ、普通人間の知識を以ては己の死の近きことを知り得べき筈なし。殊に又彼の死の惠澤千載の後に及び麵包と酒が化して人の血肉と

なるど一樣なるべきことを未然に預言したることは驚くべきにあらずや

信仰を以て崇められ

美術を以て文られて

この一時刻は限無き平安を含める

生命の初となりぬ

天の糧を味はんとする人は

歡ばるゝ賓客となりて

この筵に來れかし

不思議なるかキリストは近き未來を明瞭に見定めたるのみならず遠遠なる未來にまでも透徹せり。如何なれば後世まで己が死が標章せらるべきを豫想したりしや。キリストの死は恥辱と非道の死にあらずや。生きては人を教へ善事を行ひて、死するや斯の如くして死す。さらば死後には己が善行嘉言の記憶のみを留め置き、て死の事實は埋没せしめたく願ふは人心の常なるべく、後に遺る弟子も亦之を勉

ひるならん。然るに事實は全く之に反し、弟子は汲々として先師の耻辱を受けて死したる記憶を殷にすることを事とし、不面目の事を以て禮典となせり。爾來幾千百年を累ぬるも教會の歴史に於て個人の實驗に於てキリストの光榮は其死と聯關して離れず、彼を知らざる人に紹介するにも先づ十字架を説きたり。

此の事實の包括する所廣大ければ悉く之を擧ぐる能はず、但この歴史の事實なることを云ひて已まんとす。蓋しキリスト其人にあらざれば誰か能く此種の禮典を立つるに思ひ到らんや。是れ他人の思ひの及ぶべきことにあらず、今より三十余年前支那に於て基督敎禁止の布告の發せられしことあり、其文中に之あり、

假に彼等の說話果して事實なりとするも猶ほ解すべからざる事あり。耶穌を拜する者は何が故に彼を殺したる刑具を奪みて敎祖の形見の如くし之を足にて踏むことをさへせざるや。茲に一家の父或は祖先にして鳥銃の彈に中り或は及にて害せらるゝことありとせよ、然して其子其孫たる者其銃及び刀を拜して父祖に事ふるが如くせば如何、是れ豈常人の爲すべき事ならむや。

此は人の知慧より此事を如何に見るやを最も良く顯したる言なり。然れどもパウロが云ひし如く神の愚は人よりも賢く、神の弱きは人よりも強し。

キリストは又云へり「我は火を地に投げ入れん爲に來れり。我何をか望む既に此火の燃ゆたらんことなり」彼は救世の事業を眼前に浮べ來るときには、又この事業を成すに先ちて自ら受くべき洗禮あるを思はざることもなかりき。「我受くべきの洗禮あり、其の成し遂げらるゝまでは我が痛如何にぞや」苦痛なる洗禮を受けずんば事業成るべからず、世を咬め又清むべき烈火の燃ゆる前に彼は死なざるべからず。

第二十字架の先見に伴ふて躊躇の情ありしは掩ふべからず。我等の見る所を以てすればカナの婚筵の言に於て既に之を見るべく、其後も語未來の事に及ぶ毎に此意を含まざるなし。最後の晚餐の席に於ても己を賣らんと計れるユダの影食卓に横はれるを見るに忍びずして「汝が爲さんと欲する所は速に爲せ」と云へり。これは

暫時にても反逆者の同席を免れんとするに出でたるべしと雖も、又成るべくは煩悶の時間を短縮して早く行くべき處に行かんと欲する念に發したるにあらざるや。キリストは又云へり「其の成し遂げらるゝまでは我が痛如何にぞや」見るべし彼は前後の壁にて閉ぢ籠められし人の如く自由ならざるを感じ片時も早くこの境界を脱出せんと欲すること切なりしを、然れども彼は又知り、苦難を受け卒るまでは其靈魂は束縛と暗陰の下に在らざるべからざるを。

イエスはエリコを出てニルサレムさして最後の旅行を爲せる途中、岩石崎嶇たる坂路を勢こむで登り行く。小心なる弟子はイエスの面色に表れたる唯ならざる決意の様子を見、唯驚き畏れて隨ひ行けり。イエスは行く／＼躊躇の念と戦ひゲツセマキに至りて遂に之を征伏したり。之は次章に至りて詳説すべし。

何が故に斯かる躊躇の情ありしや。これ解釋を要する所なるが、之を解釋し得て能く事實に貼接すべき答一あるのみ。これは只肉体的の畏縮なるか否之より以上の理由あり。キリストは世に在るよりも世を去るを欲すべき理由一にして足らず。彼

は天父と偕に在るの光榮を辭して世に來り、世に於ては既に業に罪多き人間の背反に倦みたるにあらざるや。シルレルが云ひし如く、幸福なる人は時計の音を聞かざれども、流竄の境にあるキリストは焉ぞ家郷の天を戀ひざらん。然して今や再び家郷に歸んとするに臨み、縦し一時の苦痛は鋭くとも何が故に逡巡せしや。彼れの使徒パウロさへも死の近きを知りて「我今祭物とあらんとす。我既に良き戦を戦ひ既に馳すべき道程を馳せたり」と云へり。キリストは之と同じく且一層明瞭に之を言ふべしと想はるゝに、實は之に反して「我魂痛く憂ひて死ぬるばかりなり」と云ひしは何故ぞや。他なし。キリストは世の罪の重荷を身に負ひたればなり。

第三、この躊躇の情ありたれども、キリストは強堅なる意志力を以て之を制控したり。彼死するや自由の意志によりて死せしなり。行かば身に墜ち來るべき事の如何を具に知悉しあがらる。決然としてエルサレムに向ひたり。この行程に於て種々の艱難彼を迎へたりと云はんよりは、一步一步の行程盡く苦悶なりと云ふべし。テニ

基 督 傳

ソンはウエリントン侯の死を吊して「畢生の長き自殉茲に終を告げたり」と賦したるが嚴密に云へば眞にこの稱に當り得るは獨りキリストあるのみ彼の一生は十字架に向ひての不休の進行なり。エルサレムに行かざらんとせば行かずともよかりしに彼は行けり而して人の耳目を惹くべき事は之を爲せり。黙してあらば敵の怨憎を避け得べかりしに叱責と非難を以て言に積みたり。聊にても枉げて民衆の意向に同すれば生命を全ふすること難からず。否十字架に懸かりし後と雖も自ら好まひ死せざるを得しからん。ゼレミイテロールは曰く「人は繩を以て彼を縛したれども、之よりも彼が自ら加へし束縛によりて固く羈がれたり」。然り彼は身を縛せられたり、天父の聖意によりて、天父を愛する心によりて、世を愛する心によりて、古の預言によりて、又愛の秘義によりて、彼の死は徹頭徹尾自ら就きし死なり。最期の時大聲にて叫んで曰く「物凄き沈靜の時間にも耳を傾くる大愛の耳あるを如何にして喘ぎつゝ言ふべきや」。父よ我が靈魂を爾の手に托ぬ。斯くて靈魂を捧げたり。彼は死に従順なれば死も亦彼に従順なりき。

基 督 傳

彼が心裡の消息はヨハネの筆にて著しく描かれたり。其記する所によれば希臘の人にて猶太教に歸依したる人々遠國より來りてエルサレムに在りしが一日イエスに面晤を求めたり。彼等は弟子等と親交ある者にもあらざるにイエスの風を慕ふて來るを見ればイエスの教の如何に遠く又深く流布したるかを想ふべし。イエスは此人々が大收穫の初穂なるを見るにつけ、又彼自身の死が收穫の資となるを思ひ自ら慰めて曰く「一粒の麥地に落ちて死なずば唯一個にてあらん若し死なば多くの實を結ぶべし」。言ひ終る時死の畏復た少時襲ひ來りたるが天より聲あり彼に氣力を添へ再び受難の結果は光榮なりとの信念を回復したり。彼は死して死を殺し墓を毀たんとす。死して斯世の王なる惡魔を驅逐せんとす。故に彼は決然として十字架に向ひて進行せり。

第十六章 イスカリオテのユダ

イエスを賣りたるイスカリオテのユダ

イスカリオテのユダの性格とキリストが彼を撰抜して使徒の一人となしたる事は共に解釋に苦む問題あり予輩は此の問題の解釋を了するを以て自ら期せずと雖も聖書の各所に散見せる光明を收拾して此の人の一生に就き多少の教訓を得んと欲す。

ユダは猶太のケリオテの人なり他の使徒は皆ガラリヤ生れなれば猶太本土の人はユダ一人にてありしならん左ればユダは現世的王國を望み現世的の報賞を欲すること他の使徒よりも熾にして此の一念は彼を驅りてキリストの門下に来らしむる有力なる動機にてありしならんされども單に之のみにあらず彼の天質に



は感情的の要素あり。キリストの教を聴きて心に感ぜ情動きて來りし所もあるべし。然してキリストは弟子の中より十二人の使徒を撰拔するに當り、想ふに夙く天國の教の眞理を吸取し之を人に教ふるに適せりと見えし者を探りしなるべく、ユダは之より先ヨハキに師事して既に多少の進境ありしが故に十二使徒の中に加へられしならん。

弟子等の行跡を觀てこの感を強くせずんばならず。其の始めユダはキリストを好み、イエスがガラリヤに傳道を始むるや多數の人々來り從ふあり、奇跡の人を驚かすあり、これ皆ユダの満足を以て觀し所なり。初は事都て己が最も望む所に趣くが如く思はれぬ。弟子の群中にも親和あり満足あり、ユダは特に選ばれて同志の財を管するの任を託せられぬ。今は瑣細なる財も久しからずして大に増殖するの日來らんとす。期望他の弟子の心中にもありしなるべく、ユダがこの職を志願し又之を諾せし時はこの心算なりしは疑ふべくもならず。其當時は事盡く順境にして、ユダも其の心事は眞實ならざりしも、反逆者とまでな

基 督 傳

るべしとは自らも許さざる所にして欺かれざるはイエス一人にてありき。イエスは初よりユダには根を下したる所無きを觀破したり。されども外面には未だ何等の形跡も現れず。世には其精神は相容れざる間にも表面には好意を失はず。日々に裂け行く罅隙も局外の人には見ぬざること往々之あり。

ユダの胸中に初て毒心の萌したるは想ふにイエスが生命の麵包のことを説教し之が爲に一度決心して來り歸せし者をして失望して去らしめ、十二使徒にさへ危懼を懷かしめし其時あらん。是より彼が失墜の行路は始まり、心魂腐敗し初めたれば外來の誘惑の乗すべき門戸は濶く開かれぬ。ユダは天より獲べしと樂みし報賞今は頼み難ければ如かず託せられし財寶より盜まんにはどの惡心を起せしなるべく、イエスが人望猶ほ盛なる時なれば掠むべき餘財もありしあらん。ユダはこの猜疑心と罪業の自覺ありたれば、キリストが自己の死を豫言せしとき他の弟子の清白なる心を以ては之を解し得ざるに、ユダは早く之を了解し、果して己が希望を空しくせしなれとて怨恨彌よ重なり、失望の惡念は彼をして狂せしめぬ。他の弟

基 督 傳

子とても從來信せし所と今聞く所の新事件を調和するを得ずして胸中に苦戰ありしならん。但幸にキリストを親愛する情誼の斷ち難き者あるが爲に此戰に勝つを得たり。獨りユダに至りてはこの眞情なかりしが爲にあへなくも敗を取りたり。或る婦が溢るゝばかりの芳情よりキリストに名譽を灌ぎしとき、弟子は尤めて曰く「何故にこの浪費の事を爲すや」と先づこの卑吝なる言を吐きし者はユダにして他の弟子も之に雷同したり。亦以てユダが弟子の間に一種の勢力を有せしを見るべく、之に和して狹隘なる心を以て婦人の美譽を尤めたる他の弟子等も未だ道に達せざりしを知るべし。

猶他に云ふべき事あり、ユダは頗る力量ある人にして經綸の才を具へたり。この才あるに係らず十二人の首班に置かれずして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの輩に其地位を占められたり。三人の輩とても未だこの振擢に添ふこと能はず。ペテロはキリストが死を決してエルサレムに上らんとするを諫止し、ヤコブ、ヨハネは又先づ我等の望を許すべしと約し給ひし上にて我等の志願を語らんと云ふ如き語氣にて其師

を籠絡せんと試みたり。十二使徒が地位の高下につきて口穢くも相争ひしこと幾度なりしぞ。カイサリアポリの旅行はキリストが弟子を静境に伴ひて大事を告げん爲なるに其歸路にさへ相争へり。歸りて後何事を争ひしかと問はれしに皆黙然として答ふることを能はず。キリストは是に於て幼兒を抱きて、幼兒の心なくんば天國に入る能はざることを訓へたり。嘗てペテロは人我に對して罪を犯さば幾度まで之を恕すべきかと問ひしに、キリストは七度を七十度せよと答へたることあり。この問を發せしは蓋し此の時ペテロをして其の無禮忍び難きを感せしめし人ありしならん。ユダ即ち其人にあらざりしや。然かありしならんと思はるゝこと。此人に如くはあらず。又其争の理由となりしはペテロが使徒の中にて首座を占めし事にありと想ふこと實に近からん。

最後の晩餐の席上にて亦一場の争ありき。この時はキリストが晩餐を設くる一切の準備を二人の弟子に託したるを他の弟子が嫉妬の念を起せしに由るならん。嫉妬貪慾復仇の念は積もり積もりて惡魔の乗すべき門を開つつありき。夫れユダ

の失墜を専ら金錢の慾に歸するは未だ中れる者にあらず。貪慾は他の罪を惹き起す罪なれども、ユダをして是に至らしめしは單に此のみにあらず。彼の心はキリストに對する怨恨によりて混亂せり。一にはキリストが己が希望を遂げしめざりしを憤り一には自己の心底を觀破されたるを怨みて已まず。彼は又他の弟子を嫉みこの小群中にありても孤立せり。秘密なる罪念は人を孤立せしむ。此等の事相合して何時しか惡魔の入るべき戸を開きぬ。凡そ魔王の人を誘ふや初には只一の思想を兆さしめ、次にはこの思想を熟せしめて一定の目的となし、最後にこの暗き決心を實行するの機會を興ふ。想ふにマリヤが香膏を澆ぎし事に關しキリストより受けし叱責は彼の惡しき目的を結晶せしむる機會となりしあらん。然して祭司長等が如何にせば人民の激昂を起さずしてイエスを捕ふべきかの謀を講じておる時ユダは其前に出でて我に銀三十を興ふれば其謀を行はんと申し出でぬ。

彼は之を行ふに先ち猶ほ再考すべき二日をあませり。イエス今まで慎重嚴肅なる態度を以て彼を待ちたりしが此の時より彼の良心に手を着け初めぬ。然るにユダ

は敢て隠する色なく晩餐の席に列なりイエスが彼の足を洗ふに委せぬ、救主は斯くまで心の鈍れたる偽善を見に堪へずして「汝等盡くは潔き者にあらす」と云へり。イエスはユダが同席に在るを心苦しく思ひ如何にもして席を起たしめんと欲して復云ひけるは「汝等の一人我を賣るべし」と然して一撮の食物をユダに與へたり。他の弟子は之をも親愛の印なりと思ひしかり聖書には「此の食物を受けしときサタン彼に入れり」とありユダの悪計既に兆して未だ熟せざりしに、この時初めて魔王其心に入りたるなり。イエスは最早堪へ兼ねて「汝の爲さんと欲する事は速に爲せ」と云へり。他の弟子は解すること能はざりしもユダは之を解して出で行きぬ時既に夜にして頭上の空暗く罪念充つるユダの心中には彌や暗き夜やありしならん。

後にはイエスと弟子あるのみ物悲しく力なく情切なる此一夜に於てイエスの最も大なる最も美しき言は遺されぬ彼の父の家ある多くの靈臺は茲に建てられて端置の趣永に衰へず彼は己が恒久に現在すること又靈をこの世に送るべきこと

とを約束し、キリストの言の中にては後世の信者の最も親しく思はる、言此席にて語られたり其よりイエスは出でてゲッセマテの園に往き苦悶の戦を戦ひ其精神勝利を得たり今はユダの謀を行ふべき時となれり多くの捕卒の先に立ち我が接吻する者は夫れなり之を捕へよ」とて臆する念をば脱し盡してイエスに接吻す。是に至りてもイエスは全く之を棄てざるなり曰く「友よ何の爲に來るや」と友よどの一語舊き交情の紐を弾じて併て寢食を俱にせし往日の追懐に訴へ當時見聞したるキリストの言行又ユダの自ら盟ひたる言を記憶しながらも猶この罪を遂げんとするかどの意を示し又更に「汝何の爲に來るや」と問ひてユダの良心に打撃を加へユダをして自己の罪名を唱へしめこの悪名によりてなりとも反省せしめんと試みたり然れどもこの心盡しも仇なりき。イエスは既に賣られたる身なりユダは既に賂金を受けたりこの賂金は彼を樂まさずして苦めぬこれに付きて思ひ出づるは中世に書かれし怪談なり魔法者より黄金の蠶を興へられ翌日物買はんとて市に行きて見れば蠶中には木の葉のみなりしとの話あり又他の魔法者は其魔

城に多くの人と馬を招き盛宴を張りて之を饗し、人々は飽くまで食し畢るや否や裂かるゝばかりなる飢餓を覺わたりとの話あり。ユダが受けし賂金は火の如く彼の肉を蝕ひぬ。ユダは遂に祭司長の許に往きて金を返さんとせしに彼等は斥けて曰く我等何ぞ與からんやと。惜むべしこの時ユダにして祭司に行かずしてキリストに行き罪を謝したらんには如何に異なる結果を生せしぞ。苟も罪と其重荷を以て來る人々には決して「我何ぞ與からんや」と云ひしこと亦キリストなれば。ユダは身を誤られたる者なり。慰藉を得る能はず。其銀錢を神殿の戸口に投げ入れ去つて自ら縊りぬ。

ユダの性格は疑もなく一難問なり。然れども之が解釋を資くる材料なきにあらざ。第一に彼は感情的の人にてありき。感情一偏の人は如何に脆弱なるか。彼の歴史は之を証明せり。彼は感情的なるが故にキリストの言に感動し、この性格ある爲に人に教へられ又人に教ふるに適したる所なきにあらざ。然れども主義より發せざる感情の益なきはこの人の運命に鑑みて知らるべし。彼は又一種の力量ある人にて

ありければ他の弟子を指揮したる時もあり。又之よりも爲し難き事にして彼が爲し得たることは自ら御するの力強かりしことなり。其一生の行跡を察するに固く自ら操持し一度決心したる所を貫く精神凡ならず。然れども惜いかな。彼は深かりき。この罪はあらゆる高尚なる性情を食ひ盡さずんば已まず。僅少なる金の爲に師を賣り、剩へ接吻の間に此事を爲す人は必ず一種忌むべく嫌ふべき人物なり。又ユダは變節者なり。凡そ世に苦き事多し。雖も變節者の心事の如く苦きものあらす。此種の消息は唯心に感ずべくして言にて説明すること能はず。但かくして戸は開かれ、惡魔は入り來り憐むべし。此人は魔王の捕虜となりて牽き行かれぬと云ふの外を知らず。

或はユダの人物を辯護して人の思ふよりも高尚なる性格を有せりとなし。彼は畢竟誤解の犠牲となりて此事を爲すに至りし者にて其内心はイエスを賣りて却てイエスを利せんと謀りたるなりと辯ずる人あり。然れどもキリストの言は斷然として其然らざることを証す。キリストはユダを指して惡魔と云ひ生れざりせば幸

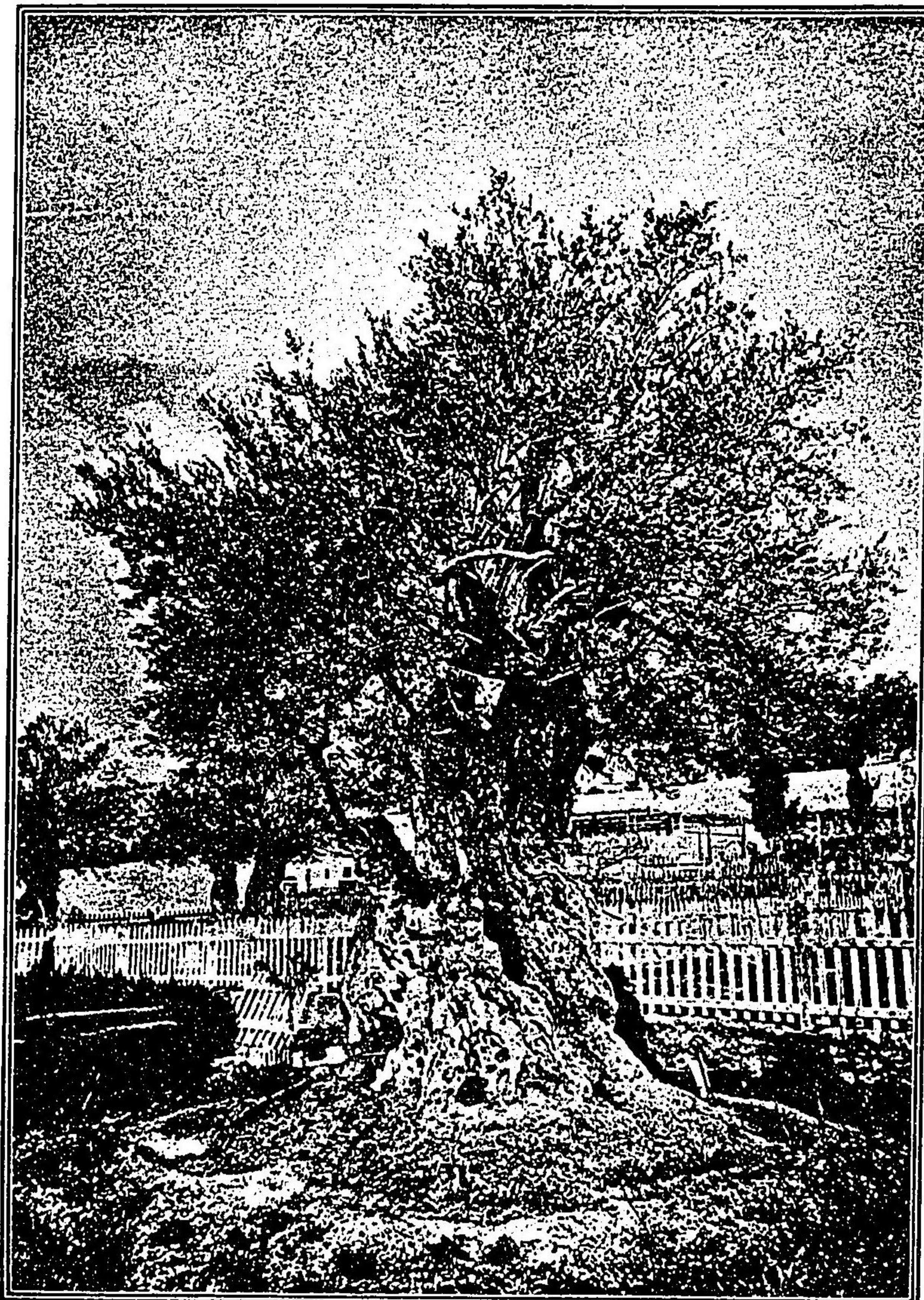
なりしならん云へり。この一語の裡に堪るべからざる零落と量るべからざる禍を物語る。たゞ僅に論者の説を道理ある如く見する一事はユダが自殺したることなり。論者はこの一事に憑りてユダに高尚なる所あり、彼が師を賣たる功により推されてパリサイ黨中の有力者となるに安ずる能はざりしは之あるが爲なりと説く。然れどもこれは架空の議論と云はざるを得ず。若し夫れ罪を犯したる後淺ましきも之を辯疏し甚しきは辯疏を要せずと思ふは罪人の最下ある者あることは云ふまでもなし。是種の人元來ユダよりも下等なる摸型に屬する人にしてユダの性質には原と高尚寛大の元素ありしは我等の認むる所なり。然れども本來の稟性の異なるが爲にユダの罪は軽く見るべきか否々原と高き處に在りたりとせば之より墮ちたる罪更に重しとせざるべからず。且此の説は、人罪を覺るは中に良心の存するによることを假定すれども、世には罪の非常に大なるが爲にこの罪一度形に表はれたる上は良心の上に押し迫りて之を感せざる能はざらしむるものあり。是に至りては良心の目如何に鈍くとも其の前に燃ゆる立つ罪の毒炎に對して之を

見ざる能はず之を見たりとて良心の働あることを證するに足らず。ユダの罪は此なり。彼が見たりしとき、罪惡の靦面に彼を睨むを見しとき、其の怖るしきに眼を留むる能はず永遠の幽冥に身を沈めたりぬ。

ユダの性質はキリストの一生を反映して其光を加ふ常に是の如き者の借に在るを忍ばざるを得ざりしキリストの苦衷如何なりけん。世の改革者となり、其名は雷霆の目懸け来る避雷柱の如くなる人さへも身を寛ぐる家庭あり、此處には柔けき愛の光に浴して萬事を見るを得ればこそ、この逆境を凌ぎ得べきに想へキリストには此の如き處なかりき。最も打ち解けて心を許したる時にも、反逆者の傍に伴ふありて彼の幸福を憂らしぬ。然るにイエスがユダを遇するを見るに、其堪忍如何に至れるよ、我を賣る者は誰なるやを知らざるにあらす。然るに之を教へ之を誘掖し、最後まで一縷の望を懸けて之を棄てんとせず。苦悶の閻深く敵は近く迫れるに、猶一度ユダの頑なる心を引かんと試みて曰く「友よ何の爲に來るや」と。

又ユダがキリストの爲に證したる實證には言ふべからざる力あり。彼は凌く偏頗

なる猜疑の眼を着けてキリストを追跡せり。左れば彼は自己の罪の爲に煩悶せる時キリストの一言一行にても己が所行に道理を付すべきものを憶ひ出し得ば之によりて自ら慰めて生きたりしならん。然れども幾度か繰返せしむ之を見出し得ず。遂に「我無辜の血を賣りぬ」と告白せざるを得ず。ユダの唇さへこの告白をなさざるを得ざりせば、況して總ての人の唇より「我彼に過あるを見ず」との告白を促すの時あらざらん。



第十七章 ゲツセマ子

彼内林にありしとき哀み哭し涙を流して己
を救ひ得る者に祈り又懇求をなし其敬畏に
よりて願がるゝことを得たり

ゲツセマ子園中の苦悶は救主の傳記中に於て最も較著なる一節にして又最も深
秘ある者の一なり。この事は較々詳略の差はあれども三福音書に於て齊しく其仔
細を記され、希伯來書に於ては更に其の意義に説き及ぼすと共に鮮明剴切なる一
語を加へて其實狀を寫したり。曰く彼肉体に在りしとき哀み哭し涙を流して己を
救ひ得る者に祈り其敬畏によりて聽かるゝことを得たりと。イエスが此の時流涕
して哭するに至りし事實はこの書翰あるによりて識り得らるゝなり。希伯來書の

記者はこの事に憑りて専らキリストが人の爲に祭司の地位にあることを示し祭司たるが故に我等が苦悶悲哀に際して助を興ふべきを説きたり然れども意義の説明に入るならば希伯來書に擧げたる所より猶遠き處にまで歩を進めざるべからずその個條も固より漏らすべしにあらざれども

ケツセマチはエルサレムに近き處にして主が弟子を伴ひ祈禱せんが爲に毎に行きし處なり祈禱の静壇この夕は最も鋭き苦悶懊惱の場となりぬ今も其跡を標して數株の橄欖樹ありキリストの大苦悶と見たる昔の樹に繼ぎて植ゑられしものあるべし。

ケツセマチの苦惱は特別は鋭烈なりしことは明なりイエスは今まで種々の苦難に逢ふに慣れ傳記者も亦幾度か之を記したり孰れも其刺痛激しからざりしにあらず然れどもこの時は之を過ぐることを遠かりしと見え非常の語を用ひてこの悲哀の中神を寫し取らんと試みつゝも適當なる形容を興ふべき言なきに困むの状ありキリストは痛く困惑せり其心は重く沈み悲哀非常にして死ぬるばかりなり

と云はれたれば聊にてもこの重荷に加ふる所あれば忽ち危き生命の緒を斷絶するに足りしならん彼は涙を流し泣きて祈りたりこは身体之苦痛にあらで之よりも遙に鋭き精神之苦痛なり思ふにこの事を書き留められしは我等を益せんが爲なるべければ徒に雅びたる含蓄を好む近代の習風に誤られて此の嚴格なる露骨なる現實を見るを避くべからず此の苦悶は神聖なりイエスは弟子が近く在りて知るを喜びながら見らるゝまで近く在らしむるを堪ふる能はずして我彼處に行きて祈る間此處に居れど云ひしは心に神聖なりき然れども聖書は我等を伴うてこの至聖なる現場に臨ましむこれ我等の爲に必要なればなり我等がこの大にして孤獨なる悲哀の状を知ることなかりせば或は彼は神あるが故に其苦惱は我等を助くること少く又さまで貴とからずと想像するの恐あり我等は云ふならん神は我が苦むと同じく苦む能はず我れ我が苦惱を感ずる如く感せざるべしと然るに誰は捲かれてキリストの恐るべき煩悶と血の汗と沈落と困惑と慟哭と涙を目前に視るに及びて此の疑念は解かれざるを得ずキリストの苦惱は一面より見れ

ば特絶なれども我等は信せんとす又我等の爲に指導なり慰藉なり悲哀の爲に孤獨となり常ならば我を助くべき人の同情も力なき時の慰藉なり是の如き悲哀早晩來ることあらん人の愛を以て復す能はざる別離の悲あり至親の情を以てするも癒す能はざる創あり眞に我を助け得るはキリストの同情以外に何物もあらざる時嘗て苦みたるキリストは我等の苦に同情を寄せ我等に伴うて悲哀損失の痕しき路を辿り給ふ見渡せば彼の足跡は印せられて我等の哀の未だ至らざる彼方の暗黒に入るにあらすや羅馬の物語に之あり夫婦の者政の苛き世に倦みて自殺せんと決心せり妻なる者先づ刃を執りて胸に刺して之を抜き断れりある息を續ぎて夫に云ひけるは『之を取れば痛はあらず』と我等の胸に刺さるゝ刃は嘗てキリストの血に染まりたるものにて先づキリストの胸を刺したるによりて其鋭き煩悶は奪ひ去られたり我等は他の友なきときキリストに遁れて云ふことを得ん『彼は受くる所の苦難によりて順ふことを習ひ既に完全なる故に凡て彼に順ふ者の永遠の救の原となれり』

苦悶は彌々烈しくなりて殆ど死なんとするばかりに感せられぬ彼はこの杯を離つこと能はざるかを問ひぬ終に天父の愛神の全能に訴へて曰く『アバ父よ爾は總ての事能はざるなし』と云へり彼は世界の救拯を中道にして廢せんとはあらずれども之を成す爲にはかくまでも辛酸ある杯を飲まざるべからざるかと問へり三度まで祈れり祈る中に心は次第に安らかなりぬ希伯來書の記者が其の敬畏によりて聽かるゝことを得たり』と云ひし如し敬畏の念は爰に現れて『父よ若し聖意に合はし』と云ひ更に『我が意を爲さんとするにあらず聖意のまゝに爲し給へ』と云へりこの中聊も背反の心なく如何ある答にても之に承服するの心を見る肉の逡巡は之あり人情の退縮は之あり本能の抵抗は之あり然れども此の間彼の目的は決して揺かず神の子たる心は依然たりき自然の意志は一刹那と雖も靈の法則の外に逸せず少時の衝突を閲して後全く靈の法則の裡に吸収せられたりこの衝突は一は信依の念と人情との衝突なり信依とは敢て人として自然ある感情を抑ふるの意にあらず事に逢うて悲み又罪なき悲を表するとともに眞の敬畏あり謙

遜なる服従あり、凡そ神が送る所の人生の悲哀失敗をば受くるに信仰を以てするを得べし。痛哭するも罪にあらず、涙は非宗教的にあらず。キリストが苦みしは當然なり、この苦を發表せしも當然なり、我等が友を亡ぶるとき、其人は人間の重荷を卸して神の平安に入しを知るも、其墓を訪うて一掬の涙を潑ぐに何の不可なる所あらん。心にもなき沈着を装ふは神の好まざる所なり、哀むと雖も我が情我が志迷はず、哀を制するに服従を以てし、苦々しき反心を起すことなくは、神は我等の涙を忍容せらるべし。

傳 督 基

服従と悲哀の間に衝突ありし如く、所好と義務の間に衝突あり。この兩者屢々逆行することあるべし。この衝突は罪にあらず、キリストに於ても自然の性は受刑の苦に逆うて起り、心體ともに苦難に當るの精神を揺かさんどす。この自然の退縮あればこそ、彼が人に代りて犠牲とあるの實を全うすることを得るべし。この兩者の衝突の始まる時より、犠牲は始まるあり、然れども長くこの衝突を留めて志を變ずるに至らしむるは不可なり。イエスは然らず、義務によりて所好に勝ち、服従によりて

傳 督 基

悲哀に勝てり、否、服従を以て悲哀を制したり。是に於て答は天より來りぬ。彼は敬畏によりて聽かるゝことを得たり。

杯は取り去られざりき、之を飲まざるべからず、一滴も餘すことなく、然れども彼の祈は聽かれたり。天使天より現はれて力を興へたりとあり、之は管に精神の慰藉にあらずして、肉體の助も亦ありしならん。杯は甘くせられしにあらず、之を飲む唇に勇氣を加へられたるあり。刑罰の質は變せざるも、之に臨む思同じからず、彼は爲すべきの業を受け、確なる歩を以て苦難に當らんとして進みぬ。

此事によりてイエスが人の爲に祭司とされる實を見るべく、又彼が善惡の際なる狭き難路を涉る其歩行如何に確なりしかは既に云へる如くなるが、この苦惱を説明するに當りて猶言ふべき事を餘せり。彼がこの苦惱に堪へしは、管に我等に同情を有せんが爲にあらず。若し之のみなりせば、彼が畏れ慄き汗の大なる滴と熱涙と相共に地に落ちし光景を如何に説明せんとするや、これ果して勇者中の勇者英雄殉教者の推して君とする人より期待すべき所行なりや、彼が是の如く畏れしは單

傳 督 基

に肉體の苦痛を豫想してのことなるや、果して然らば僕は其主より大なるなり。幾多の殉教者は長く願ひたる寢床に入るが如く死に就きたるにわらずや、纖弱ある婦人にして一滴の涙なくして苦刑を受けしにわらずや、他人は斯く勇ましく又静に堪へ得たる苦惱に臨んでキリストが斯く動き亂れたるは何故ぞや、又真に斯くまで弱き人ならばこの後彼の如く勇ましく自ら立つを得たりしは何故なるや、從容として敵人の加ふる侮辱と拷苦を堪へ頑固なる審判官に對するや、悠然として一段の高地より臨むが如き態度を以てし得たるは何故ぞや、彼十字架上にありて釘其手を貫けるに猶祈て曰く「父よ、彼等を赦し給へ、其爲す所を知らざればなり」と如何にして前後相異なること是の如くなるや、殊にキリストにありては死は即ち人界の重荷を脱して天父と偕に世の始より享けし榮光に入るの機あるに之を避けん、と欲すること切なりしは何故なるや、我等の思よりすればこの苦悶は縦し烈しくども其後の大なる幸福を思へばこの苦悶を思ふの適なかるべきに、其然らざるを見れば我等の解釋未だ肯竅に中らざるを證すべし。苦痛の畏のみにしては決し

傳 督 基

て斯くまでキリストの心胸を揺すに足らず、或人曰く「人心の中に微ながらも一塊の情熱あらば死を畏るゝ心を制し得ずんばわらず死し得るは必ずしも勇者又は失意の人のみにわらず、日々の生活が唯一様の事を繰り返すのみなるに倦みて死するもあり、又善人は死に臨んでも心動かす最期までも同一の人たる所を失はず、既に死の畏を以てイエスの苦を説明する能はざるにより、弟子の離れ去るを傷みて爰に到れりと説く人あり、此の如き説は辯駁を加ふるまでもなし、然らば他に何を以て之を説明すべきか、十分に事實に接合すべき解釋唯一あり、「神は我等の不義を彼の上に措きたるなり」と、この時彼は我等の受くべき罪の罰を受け、我等が飲まざるべからざる杯を飲みたるなり、我等に代りし罪無き魂に罰を負ひし故に、この洗禮の水は深く寒く暗くして、之に入らんとするに臨みて、怖れ泣き戦さぬ、彼が我等に代りて重荷を負はん爲に死せりとのこの事實の外にケッセイチの苦惱を説明し得るものあらず。

此の時彼は死を期したりと云ふよりも以上の事あり、即ち彼は罪の罰として自由

に死を諾せり。キリストの意識と自由は完全なるが故に必ず死を承諾する一段なかるべからず。若し夫れゲツセマテに於てはイエスは未だ杯を飲みしにあらす。飲むことを諾したりと云ふは未だ當れるものにあらず。寧ろ苦惱の眞髓はゲツセマテに在りと云はんとす。イエスが自己の生命を授けたるはゲツセマテに於てなり。人之を奪ひしにあらす。自ら之を與へたるなり。外なる苦惱に先ちて内なる苦惱あり。ゲツセマテのみにては世之を解する能はざる故に外に現れたる苦惱亦無かるべからず。多くの人の目に聳ゆる歴史の事實なかるべからず。文字に表し得べき明瞭なる或る物なかるべからず。この故にカルバリイ山上に十字架は樹てられ、人は彼が釘づけられて血潮の流るゝを見たり。我等が初めて彼の苦惱を解するはこの順序に由る。先づ十字架の話より始まり釘つけらるゝこと、架上に引き擧げらるゝこと、神経の激動等を初として導かれ内部の聖處に進み入り、心の苦悶を實見す。我等の罪を負ふは彼の苦惱の中心なり。ゲツセマテに於てカルバリイに於てどもに我等の罪を負ひたれば、彼が我等の爲せし事を解せんと欲せば、兩端を併せ觀ざる

べからず。死の苦酸去りて彼はゲツセマテより起ちぬ。抵抗は畢れり。身を情知らぬ。兵卒に渡したり。人は彼を鞠問し、彼を打ち、彼を曳き回したれども、この後復一語を發せず。屠所に牽かるゝ、小羊の如く毛を剪る者の前に黙する羊の如く口を開かず。瘡ますして十字架の全重を負はんとて進みぬ。

第十八章 基督の審問

毛を剪る者の前に黙する羊の如くして其口
を開かず

キリストは六回の審問を経て後受けたる宣告によりて死刑に處せられぬ其審問は猶太人の法廷にて三回羅馬人の法廷にて三回なり福音書の異同ある記事を参照するに大體の事實は固より明確なれども細目に至りて先後を詳にするは容易ならず手置は今其大略に就きて記す所あらんとす。

イエスは先づ猶太人の法廷にて裁判せられたり凡そ希伯來人の國体制度とも深き正義の觀念を基とせり古來此國人の云ふ所によれば一人の法官にても眞理を枉げて判決することあれば其の時神の尊嚴はイスラエルの國土を去るべく又能



く眞理に遊ぶて之を爲さば事は只一時なりども全世界之が爲に確立するを得べしと神がイスラエル國に親臨する其坐は先づ司法の廷に在りと思はれたり却てイエスは捕卒に縛せられ眼覺めぬ市街を過ぎて祭司長の公廳に護送せられぬ時は木曜日の夜にて先づアンナスの前に曳き出されたりアンナスはこの時女婿カヤバと偕に祭司長の公廳に住へりとい見ゆアンナスは教法院に在ては最も勢力を揮へる人にして多年祭司長たりしが二十年前に職を罷められたり蓋し自ら死刑を執行せし越權に由りてあるべしされど彼に次ぎて祭司長となれる者は皆彼の一門にして五人の子は盡く教法院の議員に列し行くは祭司長の職に登るべく又現任の祭司長カヤバも彼の女婿なり斯かりければ猶太人は實際の祭司長として彼を尊みたりアンナスは意地悪しき輕侮と嫌惡を以てイエスに對し初より死罪に當るべき白狀を強ひ取らんと力めたり猶太の法律によれば是の如き裁判は全然不法の處置なり被告人は全法院の前に立つて先づ一人より審問を受くべき理あり且法律上一人の裁判官一人の証人にては法廷は成立せざるなり故

基督の審問

にイエスは是の如き不法の審問に答ふることを拒絶して曰く「我は未だ曾て秘密に語りしことあらず我如何に語りしかは聴ける者に問へ」。國法の主義に原づき答へたる此言の手痛く應へたることはアンナスの郎黨にも感せられけん其一人は「汝祭司長に向ひて此の如き答をなすか」と言ひてイエスの面を打てりパウロが同じ侮辱を蒙りし時勃然として怒を發したるどイエスが從容として超自然的にも云ふべき態度を持せしとの差異は人の多く注意したる所なりイエスは再び正當なる權利に據り云ひけるは「若し我が語りし事善からずば其の善からざることを証せよ然らずして何を我を打つや」とアンナスは是に至りて語究したればイエスをカヤバに送りぬカヤバは外男とは同腹の人なれども彼はどには意志強からずカヤバは偽の証人を得ずんばイエスを誣ゆることの道なきを見たり之も亦不法の行爲なり猶太の法官は訴へられたる者を審査するを旨とすべき者にして先づ罪人を定めて後告訴人を造るは背法なり又通常の民事に於ても裁判は晝に限られ重き刑事に至りては日光ある時刻に始められ結了せらるゝを要するに夜中

基督の審問

この裁判を始めたるは不法なり。舊法廷に於て諸證人の言一致せず一人はイエスが「我神殿を毀ち得べし」と云へり云へり云へば又イエスは「我神殿を毀つべし」と云へりと云ふもあり其實イエスは「神殿の毀たるゝことあらば我之を建てん」と云ひしなり。この偽告によりて彼等が構成せんとする罪案は國民の制度に對する反逆の一にして所謂神を褻瀆するの罪なり。この罪は自ら救主と號し神の子と號すると同一種類に屬す。イエスは偽證人の相互に齟齬するに任せたり。凡てかゝる席に於ては祭司長先づ證人に向ひて「この生命に關する裁判に於て證人たる者若し罪を犯せば被告人の血と罪の血は永劫に證人の責に歸すべきぞ」と嚴告するを例とす。かく誓ひながら偽證を立つる罪益々大なり。イエスは黙せり。證人は狂せんばかりに躁立ちぬ。イエスは坦然として自ら持せり。何事も始より期したる所にして彼がエルサレムに來りしは誤謬によりて死するにあらず神の祭司として死せん爲なりしなり。敵は最早計盡きたりと見ゆしにカヤバは且怒り且畏れて己を忘れ席を起ちて堂の中央に乗り出で、問うて曰く「爾答ふる言無き乎、此人々の立つる證據は

傳 督 基

如何に。沈黙は依然として破られざりき。祭司長は再び叫んで曰く「汝はキリストの子なるか我汝を活ける神に誓はせて之を告げしめん」。これ實に列座の人々の待ちつゝありし訊問なりしなり。答は來りぬ。イエスは年老いて意地悪しげなる議員の中より立ち上がりしこの人を屹と視て答へて曰く「汝の云へる如し、且我汝に告げん此後人の子大權の右に坐し天の雲に乗りて來るを汝等見るべし」。之を聽くや人皆衣を裂けり。イスラエルの風習として神を瀆す言を聞きたる時には直に衣を裂くなり。この時祭司長は叫んで曰く「神を瀆す言なり何ぞ外に證據を要せん諸君如何に思ふや、彼は死に當れり」。

正式の判決は夜明けて後議員の揃ひたる席にて下さるべきものなれば、其まではイエスを監禁し置かざるべからず。時は正に夜半過ぎて春寒肌を刺すに、兵卒等は或は打ち或は罵りてイエスを監室に曳き行きぬ。イエス此處を出づる時ペテロが誓ひてイエスを知らずと云へることを聞けり。恐ろしき侮辱はイエスに加へられぬ。今之を詳に叙するに忍びず、但人間の最も邪惡なる暴情がキリストに注ぎかけ

傳 督 基

られたりと云ふに止めん。夜明け初めて六時頃にやあらん議員も出揃ひぬればイエスは再び呼び出だされぬ。始は少時黙し居りしが、やがて再び己の神の子たることを公言したり。是に於て第三の宣告あり又再度の侮辱は加へられぬ。

此より彼はポンテオピラトの法廷にて苦まんどす。世に永く汚名を流したる此のピラトと云ふは當時猶太の方伯にして虐政と軟弱とを相兼ねたるが爲に一方ならず猶太人の嫌惡を受けたり。方伯として來任せし始の事なりき。兵卒に令して銀の鷲及び他の羅馬兵の徽章をカイザリヤよりエルサレムに遷したる爲に、人民の激昂騒擾を招き遂に之に屈伏して事収りたり。其外にも愚なる又良からぬ所行多かりければ非常なる不人望を招きたり。彼が職務のため短期間エルサレムに上ることあらば舊のヘロデの王宮に駐まるを例とせり。この宮殿はヘロデ王が財を吝まず技巧を盡して造りたる華奢なる建築なり。この朝ピラトは常の如く政務を視んとて公廳に出で、羅馬の國神の祭壇を設けたる裁判の庭に座せり。折しも猶太人等訴訟ありとて來りたるが、聖節の過なれば異邦人の政廳に入らず。故にピラト

基督の審問

は親ら外に出で氣色を損じて「汝等如何なる訟を以て此人を訟ふるや」と問ふ。これ實に羅馬の司直の聲なり。猶太人は無禮なる答をなして曰く、「彼若し惡を爲せるものにあらざれば汝に付さじ」。ピラトは己を審判官たらしめず所刑人たらしめんとする猶太人の術に乗らずして輕侮の口氣を以て答へて曰く「汝等之を取り汝等の法律に隨ひて審判せよ」。ピラトは猶太人をして自ら死罪に處するの權能なきことを濫々白狀せしめたり。イエスは猶太人の罰によりて死するにあらず羅馬の慘刑たる十字架に死ぬべかりしなり。此等の事につきては猶太人と羅馬人との間に十分なる和協なかりしと見え猶太法にて死刑に當る罪も羅馬人に向ひて之を求むるを得ざりしなり。故に神を瀆したりとの罪案もピラトの前には効力なきを見別に罪案を構へて、イエスは國民を益惑して羅馬帝に貢租を納むるを禁じ自らキリストなり王なりと號したりと訴へたり。ピラトはイエスを受け取りて内に入り問ふて曰く「汝は猶太の王あるか」。蓋しピラトはイエスに接するに及びて一には憐れみ異し一には罪人の氣高きを感じて覺ゆる尊敬の念を催して顔色憔悴

基督の審問

して力なげなる汝果して猶太人の王あるかと問ひしなり。イエス反問して曰く「汝この事を云ふは自ら云ふか又我につてき人の言ひしに由るか」。この問の意は汝の王と謂ふは羅馬人が通常用ふる意義にての王なるか然らば我は其の如き王にはあらず又若し希伯來預言者の用ひし意にて問か左らば我は他に説明すべきことを有すとなり。ピラト曰く「我は猶太人にあらず汝の國民と祭司長汝を我に付せり汝何を爲せしや」。イエス之に答へて彼は王なること其君臨する王國は斯世の國にあらざることを若し現世的の王國ならば羅馬帝の代理たる人と相戦ふべけれども彼が要求する王權は此の如きものにあらざることを具に説明したり。ピラト重ねて問うて曰く「然らば汝は王なるか」。答へて曰く「我は王なり我は真理につき証せん爲に來れり」。ピラト曰く「真理、真理とは如何ある者ぞ」。この一語の裡には短氣、嘲笑、失望の意を併せ合めり。ピラトは思へらく此の者は羅馬の帝權を犯すほどの者にあらず唯罪なき夢想者なるのみと出で、猶太人に向ひ斷然として告げて曰く「我彼に罪科あるを見ず」と。

基督の審問

ピラトにしてこの一言を貫き得たりせば如何に幸ありしぞ之を聞きし時に人民の激怒は破裂せり我が祭司長の判決をこの一個の異邦人の爲に空文となして可かるべきイエスはガリラヤより始めて全國の民を惑はしたる者ならずやとピラトは遁路を求むるに急なりければガリラヤ縣分封の王ヘロデアンチパスが當時恰もエルサレムに在りしを幸にイエスを其許に送りぬ嘗て洗禮者ヨハネを殺したるこの心腐れる淫乱者の臺前に出でん爲にイエスは街上を曳き行かれぬこのヘロデのとはイエスは會て他に用ひしときさき輕侮の言を以て語りしに今日初めて面を對せんとするなりさてヘロデは毫も舊惡を懺悔する色なくイエスに奇跡を行はしめて一場の悽樂に供せんとせり然るにイエスは沈黙を以て之に對したりしかば本來の靈性は善人顔なる薄皮を破りて暴露し郎黨等と俱に輕蔑侮辱を以てイエスを遇したる末彼をピラトの處に送り還しぬ國賊を以て訴へられたる人なれば羅馬帝の法廷にて裁判せらるゝは當然なればなり斯かる間にピラトは其妻よりの使に接したり妻は夢の中に此義人の血を流す責の我が夫にかゝら

基督の審問

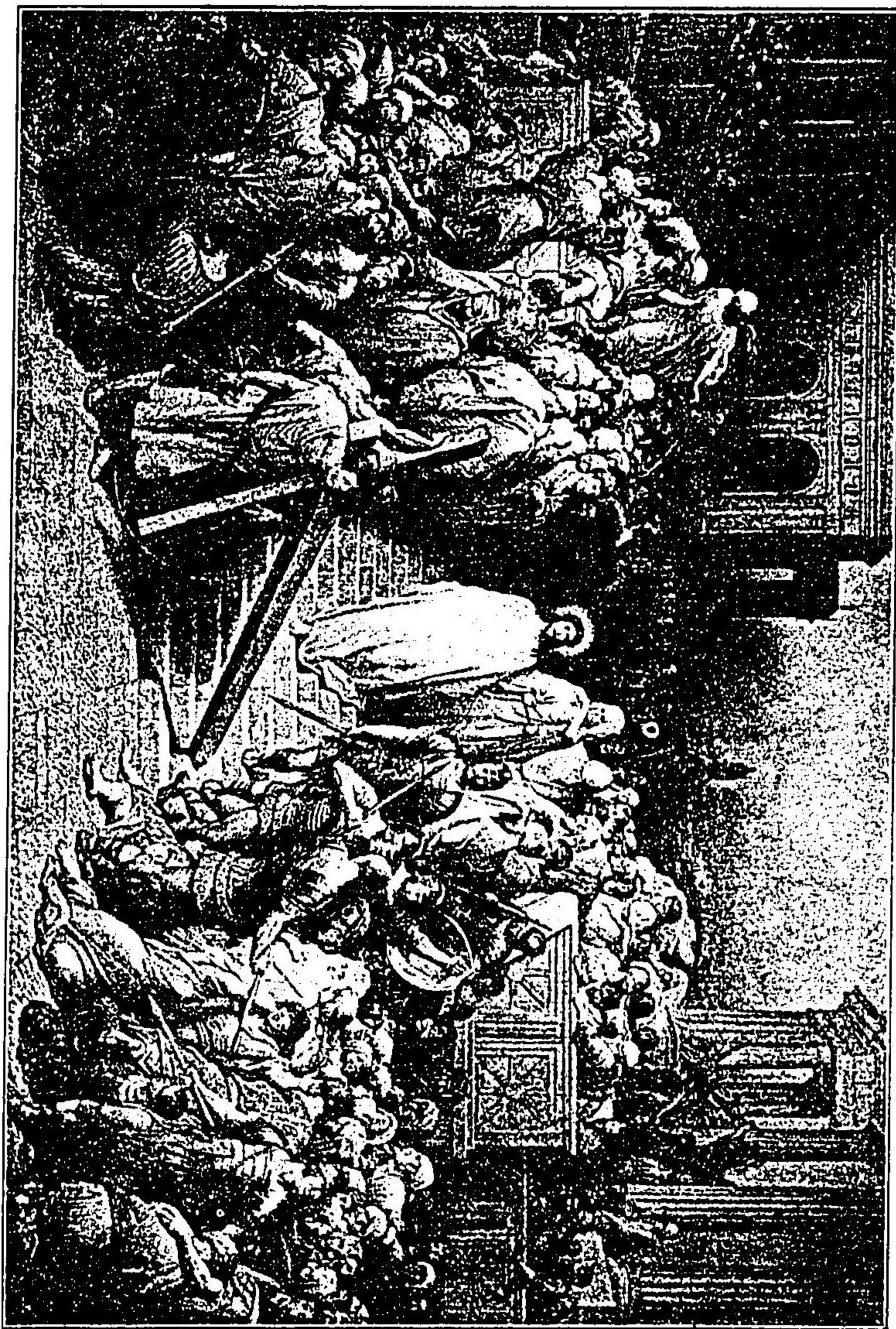
んどの想に惱まされ不安の餘りこの事を告げ來りしなり懷疑と迷信は相反せるに似て往々相伴ふものありピラトはこの報を得て心迷ひ改めてイエスを罪する罪を脱せんことを求めんとす乃ち祭司と衆民を喚びて彼等の告訴の成立せざるを諭し又半ば彼等の意を迎へんため公にイエスを鞭たしめ然る後踰越節には一人の罪人を赦免する例あればとてイエスを赦さんと言ひ出でぬ人民はいかで斯かる調和の處分を肯すべき「バラバを赦せバラバを赦せ」と騒ぎたりこの者は人を殺し盜を行へる大罪人なれども其反亂の行は却て民の悦ぶ所となれりピラト曰く「イエスを如何にすべきぞ」狂へる聲は忽ち叫んで曰く「十字架に磔けよ十字架に磔けよ」磔殺の刑に行ふ前に先づ之を鞭つは羅馬國の慘刻なる風習にして文明國に敷へらるゝ他の國には類なきことなり彼等はイエスに冠らしむるに棘の冠を以てし紫の衣を着せ手には笏に擬したる蘆を持たしめ嘲弄して云ひけるは「猶太人の王安けかれ」是に至りてもピラトは猶ほイエスを救はんものと思ひイエスを引き出だして其の傷ましき華服と侮辱を加へられたるまゝにて之を示

して曰く「此人を見よ」。然れども彼等は堅く執りて動かざるなり、曰く「我等に法律あり其法律に従へば彼は死ぬべきものなり彼自を神の子と爲せばなり」。神の子てよ一語を聞くやピラトは巽然として驚きぬ再びイエスを廳内に携へ入りて問うて曰く「汝何處より來りしや」。イエスは黙せり。ピラトは怵へ兼ねて傲然として云ひけるは「汝我に答へざるか、我汝を十字架に磔くる權威あり又汝を赦す權威あり、此事を知らざるか」。イエス曰く「汝上より權威を賜らば我に對ひて權威あることなし、是故に我を汝に渡したる者の罪最も大なり」。イエスは溫和に又眞實に裁判官を裁判して曰へり「汝の罪固より重し、然れどもアンナ、カヤバ、ユダ、祭司及び猶太人の罪は更に重しと。ピラトは今一度イエスを赦さんと試みイエスを曳き出だして叫んで曰く「汝等の王を見よ」。この時談判は數時に及びたれば人々は情益激し又倦みたり。ピラトが「我汝等の王を十字架に磔くべけんや」と云ふに答へて「皇帝の外我等は王なし。若しこの人を赦さば汝は皇帝に忠あらず」と。ピラトはテベリオ皇帝の恐ろしき名を聞くに及んで慄然として色を失へり。若しこの帝の前に不

忠を以て訴へられんか只死を俟つの外あらず。今や帝は腫物、熱病、癩病に悩まされ、剩へ唯一人なる友の反逆の爲に狂人の如くなりて、新しき暴行に此怒を漏らすを俟てるに、この人の怒に觸れて可かるべきやと、遂に猶太人に屈伏せり。然して良心の己を責むるを慰めんとて一の滑稽劇を演じ、人の前に手を洗うて曰く「我この義人の血に罪あし、汝等自ら之に當れ」。彼等は此の恐ろしき大逆の重荷を引き受けて曰く「其血は我等と我等の子孫に係るべし」。ピラトはイエスを十字架に磔くるを許して衆人に與へたり。

一、我等の観るべき重要なる事はこの裁判の罪案あり。キリストが神の子たり、イエラエルの救主たり、又一個の王たることを稱したるより罪の定まりしことなり。其審判は不法にして判決は正しからずと雖も判決の由て下されたる事項は誤らず。彼は神の子たり、救主たることを猶太人の前に表白し、キリストたり、王たることをピラトの前に表白したるが故に死にしかり。

二裁判の記事を讀む者は何人も裁判を受くる者却て裁判する地位に在ることを感ぜざるはなからん人は皆キリストの臺前に立てるなり世界の光に照らされては何者も恐ろしきまで其真相を暴露せざるを得ずピラトが傲然として猶太人の迷信を冷観せること祭司長を侮り乱民を輕せることキリストの神秘思想と實際に遠きを驚きながらも其偉大なる所あるを明に觀得たること我を御する能はずして我を苦むる良心を慰して責を免れんとして安せざること遂に猶太人の勢に服するにわらず壓せられてイエスを十字架に磔くるに至りしことイエスの頭上に掲げたる嘲弄の意を含める罪標を書き改むる請求に對してのみ頑硬なりしこと盡く寫し出でられてまがふべくもわらず又カヤバは猶太人が羅馬に併せらるゝを恐るゝに乗じてこの人を犠牲とすれば羅馬人の疑念を霽らし國の命脈を維くを得べしこの大事の前にはこの人の罪の有無を顧みるに迫わらむやとて猶太人を教唆しヘロデは私欲にして荒乱善性の皮裡に残忍と無情を包みキリストをして奇跡を行はしめて目を驚かすを求め其黙して答へざるを見て詐欺の証とな



基 督 傳

す良心を殺したる者の末路は是に至りて明なり。
然してイエスに就きては何を云ふべきか。聖書の記事簡約にして早く過ぐるを以て勿々讀過する者はこの歴史中の大眼目を觀遺さんどす。イエスは各の裁判官の前にて概ね沈黙し、侮辱を加へらるゝも之を忍受せり。然かも之に處するや氣を張り力を籠めたる痕なく、寧ろ回想の狀あり、彼果して何を想へるか。この審問も侮辱も空あるのみ何を以て答ふるも可なり、たゞ其後方に如何ともし難き情炎の流るゝありて言葉の及ばざる處より發源するを思ひならん、之を思つゝ聊も陰鬱なる沮落の色亦く又個人的の憤怒なく、超然として俗界の情を離れ、人力を以て塗ぐこと能はざる慰籍と力の泉を掬みつゝあることを自覺しつゝあり。斯くて限なく總ての人の上に離れ、彼を裁判する者の裁判人とはなれり。

第十九章 十字架と十字架上の七言

眞に斯の人は神の子なり

基 督 傳

我等は今茲にキリスト十字架上にて受けたる肉體の苦惱を叙述せざるべし敢て之を不必要なりと思ふ故にあらず故に之を潤色して慘狀を誇張するは不可なりと雖も宜きに適して之を叙し又思ふは當に許すべきことなるのみならず又爲すべき務なり左れば福音書の著者がキリストの生涯を叙するや匆々馳するが如しと雖もこの一段に到りては筆を留めて日記を書くが如く叙述細に入り一事一言をも漏らさじと勉むるが如く罵る人の聲碎くるが如き身體の苦燒くが如き渴最後の慘刑等を記載せるは理なきにあらず人或は弱き感情に酔うて徒寶玉を鑿めたる十字架を觀又飾るもの多き時に際し事の實際の如何に悲慘なるか又十字架

基 督 傳

架を負へよどの命令の如何に深重嚴肅なるかを教へ一は以て人心の硬皮を爬き破るの必要あり羅馬教會にて行はれたる感覺的の説教に反動して他の極端に馳せ勉めてこの事を説くを避くるは不可あり然れども我等は今姑く之を措き直に十字架上の七言に説き入らんとすこの七言は七個の窓の如く之を透して聊かクリストの衷心を覗ひ得べし

臨終の言は人の常に熱心なる注意を以て聴く所なり

將に死なんとする人の口より出づる言は宛がら音樂の深き調の如く人をして之を聴かしむ言は疾くども空しからず苦しき中より言を吐く人は眞理を吐く別けても記憶すべく又嚴肅なるはキリストの最後の言なり十字架に懸りたる半日の長き静默より洩れ出でたる僅少の言なり心を奪ひ氣を顛せしむべき苦悶もキリストの一生を整へたる順序と平静を亂すに足らず過ぎにし靜なる境遇に於ても勿劇なる三年間に於ても事を爲すに皆宜しきを失はざりし如く今や十字架上の畏るべき戦の間に於て爲せし所盡く適當を得たり彼は七度唇を開きたり七

なる數も亦偶然にあらざるべし満數なる七の言皆圓滿にして其間に順序あり又
 歩趨あり彼が一生の間先づ思ひたるは其敵なり最後に思ひたるは自己あり彼は
 罪人を悔ひ改めしめんとして來りぬ然して死の痛苦彼を掴みたる時又悲哀困苦の
 間に於てもこの精神は泰然として揺かず先づ己の敵を思ひ次に敵にして友と
 なりし者を思ひ次に其友を思ひ次第に範圍を狭くして終に自己の身上に及びぬ

一、「父よ彼等を赦し給へ、そは爲す所を知らざればなり」これ第一の言なり一夜
 死ぬばかりの苦悶を爲したる後六回の審問を受けたる後羅馬人の鞭撻と侮辱を
 受けたる後鐵の釘今や掌を貫けるこの時この言あり此等の悲惨に壓せられなが
 ら自己の苦惱を思ふことなくして己を殺す者の罪を思ひ之が爲に祈禱の唇は開
 かられぬ

身に大なる苦あるとき祈り得るは容易にあらず殊にキリストが感じたる如くに
 神の父たることを感ずるは容易にあらず彼は一生の曉に於て神を父と云ひ生涯

の間常に斯くありしが今や暗黒なる夜半に於て再び「父よ」と云へり暗黒の力は
 盡く群りて彼を圍むと雖も其信仰は動かず最も驚くべきは彼が己の爲に己が苦
 痛の輕められん爲に己が愛する友の爲に祈るにあらずして惡逆を極めたる敵の
 爲に祈りしと此れなり曰く父よ彼等を赦し給へ彼等の非道によりて今方に流れ
 つゝある我が血の爲に彼等を赦し給へ彼等は爲す所を知らざればなりとこの言
 の中に存する奥深き道理を推して我は知る我等はキリストが十字架より見た
 る如くに罪を見ること能はざるをパウロは敬畏に打たれたる沈黙の調を帯びて
 云へり「若し之を知りしならば榮の主を十字架に磔けざりしならん」我等が罪を
 犯すとき我等は何を爲すか自ら知らざるなり我等一の的に向ひて箭を放つに其
 箭は我等の目の及ばざる所初め狙はざりし所にまで飛びて神の身に中るなりキ
 リストは十字架よりこの歸着点に達するを見たり
 彼等は自ら爲す所を知らずキリストは之を知る故に彼等の罪の赦されん爲に祈
 るを得るなり彼等は罪なきにあらず無知は無罪にあらず果して無罪ならば如何

ぞ赦を要せんや。彼等と雖もこの残酷なる所行の悪なるを知らざるにあらず。又十字架上に刑せらるゝ罪人が如何の人物たるかも全く知らざるにあらず。然れども全体に於ては無知なるを免れず。無知なるが故に酌量せらるゝ餘地あり。人は總て自ら知らずして爲すが故に僅に希望を留むるなり。我等若し天使の如く天の光満つる所にて罪を犯したらば事情大に異りしならん。但幸に然らざりしが爲に望むらくはキリスト我等の爲に父よ彼等を赦し給へ其爲す所を知らざればなり」と祈らんことを。

傳 督 基

二、キリストは己を迫害し己を十字架に懸けたる仇敵の爲に祈りて、次には前に大敵にてありしも隣て友となりし者に向うて言をかけぬ。二人の盜賊彼と俱に十字架に懸けられたり、一人は其左に一人は其右に。一人の盜賊はイエスを罵り居たりしが、他の一人は其の無禮を責め、罪なき主の爲に証を立て、曰く「我等は爲せしことの報果を受くるなれど、此人は善からぬ事をなさりしなり」と。然して祈て曰く「主

傳 督 基

よ爾其國に來らん時我を憶へ給へ」。キリストは第二の言を發して曰く「汝今日我と偕に樂園に在るべし」と。

此の話は思ふに眞實なるべし、これ人の想像を以て作り得べきことにあらざればなり。語々紙上に立ちて記事の眞實を証するに似たり。誰か此の盜賊のなせし如き祈願をなし得るものぞ。彼は犠牲となれる主を觀て「主よ」と云へり。人は皆救主を嘲り辱めつゝあるとき、他の盜賊はキリストに向ひて「汝若しキリストなれば己ど我儕を救へ」と云ふ時、此盜賊はキリストが從容として十字架上に在るを甘じたる其態の尊ぶさ云はん方なく、其の頭上の罪標を讀まば猶太人の王と記されたり。實に王者の榮光は苦惱の間にも彰れたり。斯の人眞の王なりとて之に心服し証して曰く「此の人は何も善からぬ事を爲さざりき」と。一人としてキリストの爲に辯證の唇を開く人なき時思ひがけざる人の舌より辯證の聲は揚げられたり。實にや人黙して石叫びぬ。且彼はキリストの王なるを知りしのみならず又救贖の主たるを知りぬ。「我を憶へ給へ」と如何に愛より出でたる健氣なる言なるぞ。知らざる所なき主の脚

下に己が心胸を打抜きて云へり、「我が過ぎ越し方の悪しき生涯の始終をも憶へ給へ。如何にして罪を犯し初めしか又如何にして悪より悪に増長して遂に今日是の如き身と成り果てしかをも忘れ給はで、然かも又我が今主に依り頼むことも併せて記憶なし給へ。」彼は主が我を愛するを知るが故に、總て我が事を知らるゝを恐れず。其際限なき愛の長さ廣さ深さは我が盗賊なりし一生に餘りて彼方まで續くことを疑はざりき。或る英國の詩人は「我は今斯くてある身となりし上は、曾て有りし事を君に語るを恐れず」と云ひしが、今この盗賊も亦云ふならん。今は懺悔せる信者となりたれば過ぎにし我身を恐れず」と。彼は十字架を越えて王國を見たり、されば十字架より下らんことを欲せず、暗黒は去りて光明に入る其の曉我を憶へ給へと。

此の立証と此の祈願はキリストに取りては如何に満足に感せられけん。宛も苦悶の險しき巖間に咲く美しき花に似たり。この言は盗賊の舌より出で得る最後の言なりしなり。之に對するキリストの應答は如何に迅速なりしぞ。「今日汝我と偕に

樂園に在るべし。」今日てふ一語はこの盗賊の爲には福音にてありき。最早長き時間十字架に懸りて悶ゆるを要せず。今日此の日苦を免るべし。然して我と偕に樂園に在るべし。主と盗賊と一つ處に想ふにこの者は樂園なる言の意を多く解し得ざりしこと。は今日の我等と擇ぶ所なかるべし。然れども彼は「我と偕に」てふ言を了解せり。之にて足れり。彼の祈願は大なりき。然れども受けたる答は猶更に大なりき。祈願は河の如く答は大海の如し。

三次にキリストは親しき者に向て語れり。「婦よこれ汝の子なり。子よこれ汝の母あり。」彼は十字架の上より望み見て遠き周圍より初まりて次第に身に近き者に及び十字架の傍に其母と愛する一人の弟子の立てるを見、之より後二人の相愛し相依るべきことを薦めたり。

この言の情濃なるは孰れの註解者も常に説く所なるが、前に言ひし如くキリストと母との關係に於ては只人間的母子の關係を以ては釋さざる能はざる者あり。我

等は今キリストが母を懐く愛情の厚きを驚かすして却て其言の多からざるを驚く。彼女はいまや三十年の昔シメオンが豫言したる劍に胸を貫かれ、言ひ難き哀傷を懐ひて立てるなり。然るにキリストの云ふ所「婦よこれ汝の子なり」との數言を出でず。人の死する時は、「心の穢れ盡く解けて唯愛するもの、名の外名ざれず」と云はれし如く、至て剛頑不屈なる性質も挫けて温なる恩愛の言をもて生涯の間心に封じたる感情をも漏らすことあるを見る。然るにキリストが最後の際に語る所唯この數言之よりも猶少き言あるを得ざる程なり。固より宗教の人々に取りて守ることの難きは十誠の第五誠にして、キリストの爲に骨肉の情を断たざるを得ざることとなり。福音の道に爲に家庭の生活と家風を更へざるを得ざることとなり。然れども全く舊來の連系を断たざるを得ざることキリストの如きは之ならず。彼は天に在ます父の意を成さざるべからず。自然の關係は消え失せてたゞ存する者は心的關係の關係あるのみ。さりて安を母より受けし多年撫育の恩を忘れ得んや。是に於て愛する弟子に母の身を托してこの情を表したり。蓋しマリアに取りては彼が

逝きし後までも残るべき愛情の言の之よりは長きを望みたるならんと思像するも不可ならざるべし。されど願は否まれたり。是に於て十字架に懸り居る其人の單に人ならざるの證を教へられ得べし。

四既に云ひし如くキリストは先づ敵の爲に祈り、次に其友に語り、其母に語りて思次第に自己の身に近づき來れり。この思を彼は人に告ぐるにあらすして神に告ぐ。全地は暗憺たる色にて覆はれたる其中にてイエスは黙して居たりしが、終に聲を發して曰く「我が神我が神何ぞ我を棄て給ひしや」と。世界の光今や消ぬなんとす。天地の暗黒となりしは固より然るべく、救主の心にも亦暗黒ありき。心の裡に十字架あり。彼は今や神の面前より閉ぢ出だされたるを感じて、何ぞ我を棄て給ふやと云へり。我等は救主の靈を包みたるこの大暗黒の意を解し得たりと云はず、但茲に指し得るは彼が此間に於て依然神の子たりしことあり。此時は「我が父」と云ふに至らずして「我が神」と云ふに止まりしも神は猶ほ我が神にてありき。この信念に於て

は動搖あらず又信依の欠くるあらず彼は實際神に棄てられしにあらず又自己の罪によりて神の怒を蒙るにあらず故に神は依然として「我が神」なり暗中に握る其手は確なりきこの一言を記せしを以てしても記者の大膽なる公平を證するに足るべし或人曰く「必死の苦闘の裡より孤獨を訴ふるこの聲は信を措くに足れりこれ決して架空に發明せられ得べき言にあざればなり」

キリストの天に向うて發したる問の答とす可きは舊約書中にある愛でたき言なり。「彼は我等の愆のため傷けられ我等の不義の爲に碎かれ自ら懲罰を受けて我等に平安を興ふ」との言なりたゞ自然の原因によりこの苦悶を解き了るは明に不十分なることゲツセマ子の苦悶に於けると相同じ肉体の痛苦又友人離散の悲のみが斯くまで深き暗黒の裡に彼を包み去る能はずたゞ我等の重き罪を彼の身に負ひしことが彼をしてこの深みに落ちしめぬこの苦惱は餘りて刺すが如き叫となりて「我が神我が神何ぞ我を棄て給ふや」とは云ひしなり。

五精神の哀訴を神に捧げたる後又肉體の苦みを訴へて「我渴く」と云へりこの時悲哀の大潮は上りつめて今や稍和らぎ初め肉體の苦を感覺し得るに至りしと見ゆ、キリストは口は何をも味はざること十八時間乃至二十時間に及び十字架上に懸かりてより六時間を経過したり渴を覺ゆるも無理ならず今キリストの言の單純にして又男らしきに注意せよ彼は渴けば之を告白することを憚らざるなりインヂヤン人の勇者は烈火の中に捲かるゝも其焦げ膨れたる唇より一聲も叫聲を出さずと云ふ然るに世界の救主たる人は明白に其苦悶を知らしめ我渴くと云へり今や王位の階に上らんとしながらも甘んじて一杯の水を乞へり

彼若し神の力を揮へば甘美なる清水を地に波立たしむるをも得しならん井を造り泉を造りたる彼は燃ゆるが如く猛るが如き苦悶を覺えたり嘗て午日サマリアの井の傍にて渴せしよりも猶烈しく渴したり如何にして之を醫せんとするぞ此時は實に危かりき想ふに目に見えざる敵は昔ながらの誘惑を以て彼の心を牽きしなるべく「我は一言の命令によりて水を造り出だして我が渴を醫せん」と云はし

めんとして誘ひしならん。然れども彼は應せざりき。彼はこの深秘を底の底まで窺ひ、杯を澀まで飲み干して、揺かざる志を天父の前に捧ぐべかりしなり。彼は渴きぬ。香水を得んとてのみならんや、安息を得んとて、家郷を得んとて、早く萬事の終らんことを求めて渴したり。早く父の家にて飲食したしどの願最と切なり。然れど杯は早や殆んど飲み乾されて彼は復た唇を開きぬ。

基 督 傳

六「事畢りぬ」。イエスの靈魂が長き間其の苦樂の器たりし肉體と別るゝまでには猶須臾の時を餘せり。然れどもこの時苦惱は既に去りて勝利報賞の盛なる念は復來りぬ。過去を回顧して最早この世に於て未だ成さず未だ忍ばざりしことはなきを知り、乃ち曰く事畢りぬと。

事てふ一語の裡に含まれたる喜深き全意をば我等斟み盡すこと能はずた。彼が之を成すべく神より付與せられたる其事業を指せるものとして之を解するも可ならん。之を讀んで我等が直に感ずる所はキリストの生涯と我等の生涯の距離甚

基 督 傳

だ大なることなり。誰か果して是の如く語り得るものぞ。我等の生涯は綻びたる端成就せざる事業にて充てり。人死に臨んでは宿夢の斷ち難き者あり之を果たさん爲に猶暫時の餘日を與へられんことを冀へども、この願成り難し。我が書我が書と或る名高き文士は臨終の床に於て叫びたりとかや、獨り此人のみあらず、死の近くを知りては、誰か完結せる事業を身後に留め得んために最後の點睛を加ふるを欲せざる者ぞ。然れど人は皆事を中道に止めて世を去るなり。獨りキリストは萬事を良く爲せり。正しき時に於て、正しき處に於て、正しき道に由りて、多きに過ぎず、又少きに失せず。事は畢りぬ。彼は休息に就き得る也。

事は畢りぬ。全世界の罪の爲に大なる犠牲は供へられたり。神の律法を破り世に於て何の成就する所あき我等の爲に新しき活路は開かれたり。彼が事畢りぬと云ひしとき、其心は管自己の爲に、苦惱の終りしを喜ぶのみならんや。彼は又其民の爲に喜びたり。最も貧しき最も罪深き最も不完全なる者が今より平和を以て神に到り得ることとなりたれば、この門戸一たび開けて後は人も惡魔も之を閉づるを

得ず。

キリストは幼より天父の事を成す爲に忙かりき彼の一生を貫きたる精神は彼を
遺したる父の意を成し其事業を舉げんとする志なりき今この業を全く完成した
れば信じて神に依る心は喜に満ちたる叫となりて現はれり。

七「父よ我が靈魂を爾の手に託ぬ」我等は既に事畢りぬと云ひ得ざれば又以上の言
に「真理の神よ爾我が魂を贖ひたれば」との理由を付せんと欲す昔或人は修道院に
入らんとして「我は死の論理を怖れざる論理に入らんとす」と云へり「父よ我が靈魂
を爾の手に託ぬ爾我を贖ひたれば」との言は即ちこの論理にあらずや我等の靈魂
は罪ある靈魂なるが故に先づ淨められ贖はれたる後にあらずんば父の聖手に託
ねらるゝ能はず然れども彼は事畢りぬと云ひて直に潔白なる靈魂を天父の揺か
ざる疲れざる手に託することを得たるなり是の如き手に落つるは最も祝福すべ
き事なる故に彼は云ひしなり「父よ我が靈魂を爾の手に託ぬ」と。



基 督 傳

「活ける神の手に落つるは恐るべきことなり」然り否々ながらこの生命に離れ心に絡む罪のまゝにこの世より曳き出ださるゝは恐るべき事なり。豫め準備することなくして生命正義の絶大の力ある手に落つるは恐ろしき事なり。然れども平和に充ちたる信念を以つて自ら興へ落つることも遠く落つるにあらず活ける父の手に落つることを知るは福なり。且イエスがこの語を用ふるや他の人の云ひ得ざる深意を含めたり。其意を云へば「我は自ら擇むにあらざればこの生命を離るゝを要せず之を捨つるは己の意己の行によりてするあり。我が魂は強て求められしにあらす自ら擇ぶ所に隨ひて之を天父に託ぬるなり。人之を奪ふにあらす我自ら之を辞するなり」と我等はキリストと同じ深意を含ましめて之を云ふ能はずと雖も亦之によりて日常の生活に處する氣象と又特に死に處する心の態度を顯して之を言ひ得るなり。我等は生くるも又死ぬるも専制の主に屬するにあらず又知らざる力に屬するにあらずして神主イエスキリストの父に屬するなり。フーベル曰く「神に依るは事の結局なり又事の全体なり」。

第二十章 基督の埋葬及び復活

主 實 に 馳 り た り

基 督 傳

キリストは葬られしが、この埋葬に關係して異常なる事件起りしことはパウロが傳へたる福音の一部あり抑彼の遺骸は他の罪人の如くに汚辱を受けざりき。十字架に懸けしまゝに棄て置きて兵卒の汚辱するに任されずして愛する人々の手にて取り下され敬意を致して墓中に葬られたり。總て彼の一生には不思議なる和合の多きことなるが處女より生れし人は今や人を葬りしことなき新墳に置かれたり。行き慕れし旅人が路に一夜の宿を求むる如く彼は靜なる休息をこの暗き客室に託したり。墓は園の内にありしと云へば春の花傍へに咲きシリヤの空の柔けき日の照らす處なりけん。シャロンの薔薇は薔薇花の間に置かれたり。有意か無意か



此も亦一の豫言となりける百花冬の間は根に籠もりて春風の催すを待てる如く、
彼も亦定まりたる時に立ち出づるまで地の中に休みたり。
彼は腐敗を見ざるべしと聖書には記されたり。彼を覆ひし石も彼よりは多く變り
ぬ。彼の靈魂が別を告げしこの世の物一として變せざるなきに、聖き墓にて眠りた
る彼の躰のみは變せず。花咲く中にて潔き布に裹まれ、召命の來るを俟てり。又注意
すべきはキリストの墓は人より借られたる墓なりしことあり。人の爲に貧しき狀
態にて死したりしかば、其墓は愛する者の力の及ぶ限り、良き處を選びたれども、借
られたるものにてありしなり。又キリストが甦りて墓を辭したる其跡に注意せよ、
頭を裹みたる手巾は躰を裹みたる布と混じ置かずして疊みて別に之を置きあり
しと云ふ。其一生の間、事に神の意を成したるキリストなれば甦る時にも整然た
る順序を保つべかりしなり。物の順序を亂すことは罪とせならずとも、罪に近き
所あり。万般の事序を失したる斯の世に於て、順序を保つこと難しと雖も、キリスト
の生涯に於ては何事を爲すにも圓滿なる秩序を履めり。臨終の苦悶より發したる

聲にも亦之ありき其初め聲望の日に隆る時心も動かさず坦然として事業を
 始めたる静平は一貫して是に到る彼の手に付與せられたる復活の力を用ふる時
 も毫も軽く揚り卒に動くの態度なかりき。
 キリスト死より甦りたりこれ基督教の信仰の中心となれる斷定なりこの一事に
 して倒るれば他も亦倒れこの事にして立たば他も亦立つべし左ればこの書の大
 体の結構には少しく離るゝ處あれども今より簡短に復活の證據を擧ぐるも亦證
 者の許す所なるべし然して後復活の事實がキリストの事業と個人の生活に關係
 する點に及ばんとす。

イエスキリストの活ける教會は即ち復活の實證あり教會に生命あるは救主に生
 命ある證據ありイエスキリスト死するや弟子は深き失望に沈みたり牧者撃たれ
 て羊の群は散りぬ然るに時を経ずして一大變動は起れり怯懦なりし者信念鈍か
 りし者全く別個の人となれり勇くなり強くなり確乎たる信仰にて滿つる者とな
 りぬこの間外部の境遇の改まりしにわらず彼等は依然として狼の中にある羊な

り今や世間を敵として戦を起さんとするに當りて勇み立つよりは寧ろ力を落と
 すべき形勢なり之に係らずして彼等は此時新にキリストを信する信念を醒起し
 この信仰は彼等を變じて男子らしくならしめたり斯かる驚くべき變化を生せし
 めたるものこの間にあるにわらずは何を以て之を説明し得べきや他に之を説明
 し得べきものあらんや復活の外に復活は彼等に新しき信仰と希望と力とを鼓吹
 したり之をあらばこそ彼等は衆寡懸隔せる大敵を物ともせずに向ひたるなれこれ
 ポウロの説明したる道なりポウロがコリント教會に贈りたる第一の書翰はキリ
 スト死後三十五年以内に書かれたることは極端なる懷疑家すら否定せざる所奇
 り此の書翰を讀むに福音の全体は復活したるキリストを基礎として建てられた
 りキリストは墳墓の極梧を破りて甦りたり甦りたるキリストの力を頼みて弟子
 等は戦へり。
 總て他の説明の全く不十分なるを思へば以上の見解の正しきこと益明なり昔
 は弟子とキリストと合意して人を欺きたりと説く論者もありたれども是の如き

は有り得べからざることをなれば、この議論は今既に降服したりと云ふも可なり。キリストの教會の如き制度が虚誕の基礎に建てられたりとは、痴者と雖も考ふる能はざる所なり。是の如き無情なる又荒唐なる虚誕が是の如き菓を結び得べきや。又今日の學者にして、弟子等は欺きしにわらず欺かれたりと解する人あり。若し此事の見証者が少數の人にてありたらば、又説明すべき事件が少數にして、斯く顯著ならざりせば、是の如く説き去るを得しならん。然れども多數の人悉く愚とせられ、悉く調子を調へ終まで一貫して狂氣となり、この狂氣より生命を犠牲として惜まざる信仰の出で来るべしとは信すべき事にわらず。又神話説の如きは一言以て之を破るに足れり。この事實は一朝忽然として生じたることにて、徐々として神話の成長するを許さざるなり。如何なる器械を用ふるも短日月の間は是の如き神話を製造する能はず。故に我等は維持し得べき唯一の解釋、即ち主實に甦りたりとの眞實なるに安せんとす。甦りたるキリストを信する信仰は教會を今日の教會とならしめたり。

次に我等は復活とキリストの事業との間に存する關係を考へんと欲す。復活はキリストの死と復活を對偶せり。曰く「人の子はエルサレムに上り長老祭司學者より多くの苦を受け第三日に甦るべし」。弟子が初めて之を聞きし時は先づキリストの死と甦る報知に驚きて光明なる復活の消息は他の半面の暗黒に没せられたる如き觀あり。れども今我等は之によりて死はキリストの事業の末にわらずして中央あることを見得べし。彼の死が事業の必須の部分なりしとは前に説きし如くあるが、死は復活と聯ねて觀られたり。復活は彼の事業の最後の試験場ありとせられたり。曰く汝等この神殿(身体)を神殿と云へるなりと毀ちて我三日にして之を建てんと見るべし。彼は甦りしにわらずして自ら甦りしなり。又彼は弟子に語りし中、聖靈は世をして義の何たるを知らしめん、これ我父に往けばなりと云ひしことあり。言を換へて云へばキリスト若し父の許に往かずして死者の間に横りたらば、彼の事業の全般は失敗にして人を欺きしものとならん。唯彼の復活により其義は證せらるゝ

なり。彼若し甦らずとも其生涯と教訓に於て世に遺すべき者は固より之あるべく、其果して幾何なるかに就きては議論あるべしと雖も我等は是の如く悲むべき敗類の中より幾何のものを收拾し得べきかを算するの必要を見ず、彼にして眞に神ならずば甦らざるべからず。彼若し今も死の掌に握まれ其遺骨はシリヤの空に眠るとあらば、彼が生前の言直に彼を罪するの宣告となるべく、救贖の事業は終に救贖とならざるを信するの證據となるべし。然らずして彼の墳墓の空虚なるを見、其遺骸の爰に横へられし時と同じく腐敗之に手を觸れず死痕跡を留めず、生命永に新あるを見るならば我等は天父が彼の事業に印して之を承認し其義しき名分は天の聲によりて證せらるゝを知らん。我等彼の空しき墓畔にて、彼は此處に在らずして甦りたりとの天使の消息を聴き、又弟子等の心に行き渡る希望と喜の光を見ればこそキリストの義を確信するなれ。然らずば彼の言の最も深きもの彼の事業の最も大なるもの盡く空に歸せしならん。

然して復活はキリストの既に成せし事業を證明するに止まらず、死が事業の結局



にあらすして其中央なることを證明す。固より一面より云へばキリストの事業は死せし時に其終を告げたり。然れども他の一面より觀れば之を天に於て完成せん爲め今僅に中途まで歩を進めたるのみ。死は其事業の結局となるは他人の事のみ。例へばモーセの事業は死する前に成されたり。我等がモーセを追懐するは彼の死にわらず又天上に於て彼が爲すなる事業にわらず。斯世に於ける長き年月の信實なる忍耐せる勞苦にあり。人死すれば其事業は終了し其餘澤次第に消初む。後人之に躋ぎて起り更に新しき事業を營み、世の追懐尊崇を受く。獨りキリストの事業は死と共に終らず。死して神の右に昇りたる後に於て事業大に増進せらる。故に彼の名は彌増に生長す。神の僕たる人の經營は孰れも劃せられたる時限ありて時を逐うて減退す。これ皆神の光明の斷片なれば代謝して一段の大なる光華に併取せらるゝなり。この間にありて益々光明を放ち益々大さを加ふるものは唯キリストの名あるのみ。夫れキリストの死は人間を罪惡の死より喚び起し罪人をして神に和合し得る者となしたり。然れども死より起したる上之に加へて新生命に歩むべ

き力を授くるにあらずんば其爲せしことも永く存立するに足らざらん。人一人たひ死より喚び起てされたるのみにて終には再び死に入るならば是れ一朝の浮光に弄ばれたるのみにて其後の暗黒は更に深からん。然れども彼は我等を招きて新しき生命に入らしめたるのみならず、現在天に於て活動せる力によりて新生命の途に導かれ、世間と肉体と悪魔の勢力に抵抗してこの生命を維持することを得、キリストは権力ある神の子として宣示せられしが、この権力をば天上の國に於て教會の擴張と其民の教育の爲に用ひつゝあり。

此點は後章キリストの昇天を説く所に到りて猶充分に解説すべければ之を措きて之よりキリストの復活と我等の復活との關係に説き入らんとす。キリストにして甦らずば説教すべきことも信すべきこともあらず、何となればキリスト甦らずば未來の生命あらず、未來の生命あらずば我等の信仰も又説教も空に歸せん。然らば一使徒の云ひし如く我等は人の中に於て最も憐れむべき者なり。キリストの福音は其死の福音たると同じく又復活の福音あり。夫れキリストの復活が我等にも未

來の生命あるを證すとの福音は果して信なるべきか、人として死てふ最後の敵と對陣せざる人あらず。世界の在りしより以來生れ出でし人孰れも早晚この戦に臨まざるなく、戦の決する道は唯一あるのみ。縦しや幾世紀の經驗を重ねて發明せる手段を盡し、愛の及ぶ限り、學問熟練の及ぶ限り、涙と祈禱のあらん限りを盡せども結局は明なり、我は屈從して敵は戦勝者たらざるを得ず。軌近知識の進歩によりて幾分か人の壽命を延べ得たる事は事實なり。然れども斯く聊か得る所ありし一方には、昔時よりも遙に困難なる状態の間に生活を維持せざるを得ざる故に、死の苦痛は大あるを加へたり。且死は總ての人を虜にするのみならずして、永に之を囚禁するを見る死は一たび勝ちて復た敗るゝ時あらず。塚上の青苔は何の時か封を解くべき。何人の巧智か會て死の捕虜となりしものを奪ひ返せしぞ。死の勝利の斷じざる恐ろしさよ、我等之を感じて絶望し煩悶する時なしとせず。凡そ如何なる争ひにも盈虚消長の變はあるものを、戦場の運命も或は開き或は閉づ。斷じたりと見ゆし希望は忽ち復た燃ゆ立てり。獨り死の大戦に於ては一樣の結局ならんとは。

この深秘に對して我等何を云ふべきか先づ問はんキリストの未だ生れざる前に
 も神を信じたる人あり此等の人は何によりて心を安じたりしか蓋し彼等も信
 仰と希望の高く昇りたる瞬間には人既に神の像に肖せて作られ且つ神の愛の裡
 に生息する以上は亦再び生くることあるべきを觀得たるや争ふべからずヨブは
 人死せば復た生くべきかとの問題を提起し一種の見識を以て之に答へたり或る
 人が信仰の高潮に乗じて「我は義しくして爾の聖顔を見ん我爾に肖たるものと
 して目醒めん時心満足すべし」と云ひし如くヨブも亦再び醒起すべき時を望み
 り天より召命の出づるまでは幾多の年月を隔つべし然れども我身の一變すべき
 時まで定まりたる間我は待たん我は永遠に棄て置かれざることを知るが故に其
 間の年月を數どもせじ我は知る其の時に於て神の懷は我に向うて動き來らん我
 を呼びたまはん而して我應へん爾必ず爾の手の作を顧みたまはん言を換へて
 云へば爾我を造りたりこの魂もこの肉體も畏るべく驚くべく造り之に賦するに
 永遠を慕ひ又爾を慕ふ心を以てせり爾我を必要とするの刻到來すれば我を眠よ

り喚び起し給はん」と云ふ意あり信仰是に到りて大なる勝利を奏したりと云ふべ
 し唯夫れ信仰大なるが故に其時短く且希に之ありき舊約聖書中の聖者は眼開け
 力加はりし上游に於ては斯く信じ斯く語ることを得たれども概して一段低き水
 平を歩みたり彼等は自己と神とにつきては眞なる觀念を有しこの觀念に原づき
 て信仰を建てたれども未來に關しては未だ明白なる約束の憑るべきなく神より
 出でたる事實の基とすべきものなかりしなり故に一朝暗黒なる時來り死の勝勢
 の當るべきやうなきを見るに及びては再び頓挫せりたゞ神を望むの大なるによ
 りて復活の生命を維持するを得ればなり
 人死すれば復た生くるを得べきか多くの傷める靈魂はヨブの疑問を反響すれど
 もヨブの勝利の答を反響する能はず斯くて幾百年を経過したる後イエスは之に
 答へたり其答は完全にして明白なり曰く我は復活なり生命なり我を信するもの
 は死すども生くべし我を信する者は死さざるべし我等は今イエスの力ある斷定
 に復り得るなり親しき者の亡き骸を野邊に送り土を柩の上に蓋ふとき泣いて閉

傳 督 基

さしたるこの門再び開かる日のあるべきやと問ふとき、キリストの言を以て之に答ふるを得るあり。然れども言語の證明のみにては不十分なり、この言は美あり力あり慰藉あり。然れどもこの以上に要するものあり。我等は實際この勁敵と戦ふて勝ちたる者あること、この人死の刺を抜き墳墓の勝利を奪ひたることを知るを要す。この言を語りし人が自己の勝利によりて此言を實證したることを知るによりて死と墳墓の恐ろしき疑問は初めて満足すべき解釋を得。夫れイエス、キリスト死より起きて眠りたる者の起き出でし初めとなれり、キリスト生くるが故に我等も亦生くべし。キリストが我等の爲に死を征服したりとのこの思想は二つの部分に分つを得べし。第一は靈魂の生命長く續くことなり。我等信仰によりてキリストに合し得るとき、生命我が心胸に流れ入る。この生命に墳墓は觸るゝ能はず、まして之を滅ぼす能はず。「我を信する者は死せず」。この生命を得たる者には死は只片雲の空を過ぐるが如く直に日光の中に融け終るべし。キリストに繋がる縁故を斷つ能はず、之を妨ぐることをすら能はざらん。河の湖水に流れ入り復流れ出で、其清澄

傳 督 基

なる水濁りを留めざる如し、イエスキリストを信じて得る生命は中頃死てふ沼澤を過ぐるも、復清く澄みて彼方より流れ去るなり。之は只一面のみ。本來の生命永存するてふことの中には、留めらるゝ價値あるもの盡く留めらるべきを含有す。所謂肉体の復活の意義及び證據は此にあり。イエスキリストは第一に靈魂を贖はん爲に死せり。然れども之に加へて肉体をも贖はん爲に死せり。肉体の贖はるゝまでは猶ほ長く待つことなるべく、其間死は暴行を逞しうすべし。雖も主一たび着手したる事業は成さずんば止まざるべく、先づ靈魂を其許に移し、他日同伴者たりし肉体をも然かするなるべし。シオン山の土が昔日の聖徒に尊まれしに増りて救はれたるもの、塵はキリストに重せらる。縦し幾世紀間の風雨は之れを散乱せしむべけれど、必ずや他日再び収集せられ、我等の分身たる此の値あるもの亦活動するならん。此時我等は死に向ひて云ふことを得ん。汝は我が靈魂を奪ふの力なく、又上より許さるゝ外我が肉体をも損するを得ざりしにあらざるや。かくて完成せる人は天に携へられて榮あるイエスキリストの位する許に詣るあらん。

燕は其巢を離れ

靈魂は我が疲れたる胸より離れん

されど我が墳墓の上に降る雨清かれよ

我が靈魂も燕のごとく

浪路を越えて復歸り來ん。(ベッドース)

實に復活なるこの事實の重大なる過稱せんと欲するも能はず。この奇跡にして信
じ得べくば他の奇跡も亦信するに足らん。キリスト死より甦りたらば、彼は權力あ
る神の子にてありし如く今も在り。キリスト死より甦りたらば、皮相はともあれ、死
は勝者にあらずして敗者なり。キリスト死より甦りたらば、信する者の靈魂は死す
る時に聖くなるによりて完きものとなりて光榮に入り、肉体はキリストに繋が
りて復活の時まで墓に休むべし。然れども其も亦久しからずして起きてキリストの
光榮ある身に肖たるものとなるべく、長く別れたる同伴者再び相結んで又永にキ
リストと偕に在らん。

第二十一章 基督の復活的生命

我に觸るゝ勿れ我未だ我が父に昇
らざればなり

キリストを信する人に取りては、死は生命の中絶にあらずして生命の上進となり、
神を離るゝにあらずして天父の容光に接するの時となる。これキリストの復活に
よりて表現せられたる大真理なること既に説けるが如し。然れどもこの事實の意
義は以上の真理にて盡されたるにあらず。聖書には猶他の人の復活したる事を記
しあれども、其等は皆前と同様なる地上の生命に返りたるなり。キリストの復活は
之と異にして更新せる生命の發現なり。ヤイロの女、ナインの少年、ラザロは甦りた
れども皆元の如き人として元の處に歸りたるに過ぎず。キリストは新しく且つ榮

基 督 傳

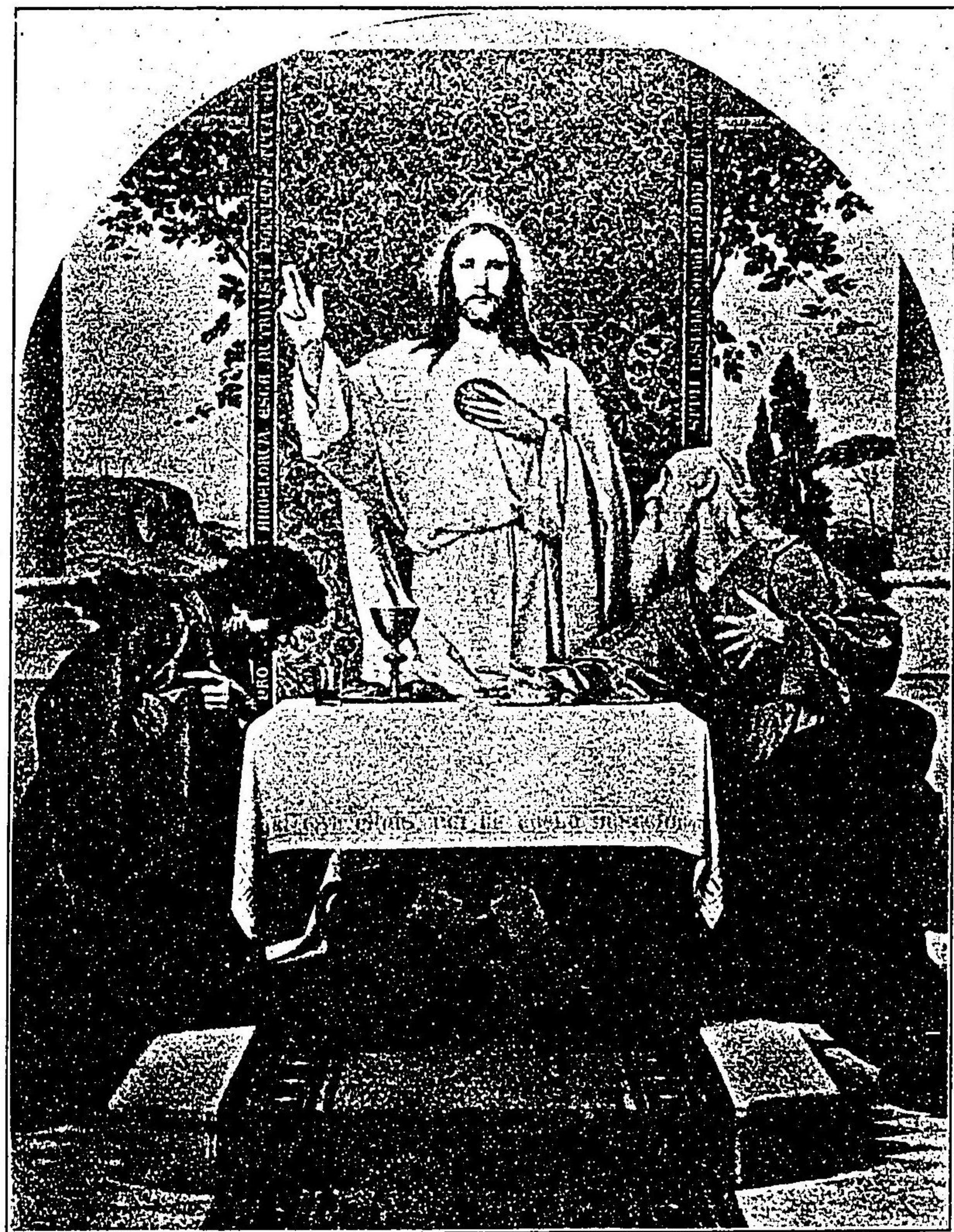
光を帯びたる姿を以て再び斯世に出現せり。
 キリストは復活して後四十日間地上に止りしが其間少なくとも十一度人は現れ
 たり第一は園中にてマグダラのマリアに現れたりこのマリアは七の悪鬼を逐ひ
 出だされたる婦にして他の數人の婦人と俱に主の聖き足跡を慕ひ來り其所有を
 捧げてキリストに仕へたり最後迄も十字架の下を離れず万端の事畢りキリスト
 に塗る爲めの香料を調へて墓地まで隨ひ行けり此日はまだはの暗き晨再び墓に
 來りしが墓の空虚なるを發見し之を他人に告げんとて去らんとせしときイエス
 は「マリアよ」と其名を呼びたりマリアはキリストとは知らずして園丁ならんと思
 ひ、主の遺骸を何處に移せしやと問へり女ながらもキリストの遺骸を取り歸らん
 と思ひしなりこの時初めてキリストなるに心付きて「夫子よ」と云ひて其足に取り
 縋らんとすキリストは柔に然かも明瞭に之を拒んで曰く「我に觸るゝ勿れ我未だ
 我父即ち汝の父我が神即ち汝の神に昇らざればなり」キリストが此言を以てマリ
 アの近づくを拒みし所以は彼自身が不淨なりと云ふにあらず又新に帯びたる尊

基 督 傳

榮に近づくことを許さるるにあらず但マリアの「夫子よ」と云ひし言によりてマリ
 アが只管に在來の關係に返るを喜び之より新しくして光榮更に大なる状態の開
 くることを悟らざるを見ればなり「我に觸るゝなかれ我未だ父の許に昇らざれ
 ば親密なる相愛の情故の如く交誼の絶ゆる故の如き其時は復と亦きにあらず
 其時は來らんとして未だ來らず今汝に許すを得ざる近接は他日許さるゝを得ん
 我天に昇りたる後汝は意ふ如く我に縋り付くを得べし其時は靈を以て我に縋る
 なり我が父は亦汝の父にして汝の神は我神なりとの事實に由りて汝と我と終に
 一處にあるべし」とかくマリアは受けし恩恵の豊なるに代へて「行きて汝の兄弟に
 告げよ」と命せられたるときは失望の念なきにあらずマリアは主の甦りたる
 音信を使徒等に報ずる使徒とせられたり。
 次にキリストは墓に參せん爲に來りたるマグダラのマリアとヨハンナの二婦人に
 現はれ彼等をして弟子等にガラリヤに行くべきこと又彼處にて彼を見るべき
 ことを告げしめたり是の如く彼は弟子を北方の郷に行かしめて多少の困難を課

したりこれ一は弟子の益を思ひてなるべし、一にはイエスが復活の立證者廣く他の地方に散じて證跡の多からんためなるべし、又一にはイエス親ら幼時より住み馴れし郷國を觀んことを願ひしや疑を容れず彼が昔住ひし家彼が遊びたりし丘陵彼が舟を泛べたる湖水舊知の顔を見るべく故山に眷々たりしは洵に人情の常にして眞實なる又丈夫らしき感情と云ふべし。

第三回は蓋しシモン、ペテロが獨在る處に現はれたるべく第四回は二人の弟子がエマオ村に住く途中にてありきこの二人は何事か殊にイエス同行の榮を受くるに足ることありしか知るを得ず但知るべきは彼等が深き悲哀に沈み借に歩む道すがらも往年の希望一朝空に歸せし破船没落を語らひしことなりこの時思ひもかけずイエスは來りて道連れとされり彼等に何事を語り居りしやを問ひ答を聽きて後聖書に原づきてキリストに關する事を説明したり彼等は知らずと雖も神これ等の無識なる人に伴うて歩みたり彼等は其人の語るを聴く中に心の燃ゆるを覺えたりやがて旅亭に着きぬれば其人は別れて行き過ぎんとせり眞醇なる優



美なる人間の情趣に點染せられたり昔の戯曲家の云ひし如くこれを此世に
 生息したる第一等の眞紳士あり彼は招かれざるに強ひて客遇を求めず又求むる
 様をも見せず客の爲に慮る心配をかけざらんが爲なり然れども二人は懇に彼を
 留たりければ彼は乃ち同じ旅亭に入り偕に食卓に就きぬ彼等が擧する所なれば
 定めて粗薄なる食事なりしならん食する中彼は麵包を取りて之を擧き與へたり
 是に於て彼等の目開けてキリストなることを知りしが其時彼は忽ち消えて見る
 べからずになりぬイエス常に小き團樂の主人にてありき賓客としてある時も其
 席の主人の如くなれりカナの婚筵に於ても斯くありき今も猶ほ人の心に主人と
 なりて我が聲を聞きて戸を開く者あらば我は其人の所に至らん而して我は其人
 と偕に其人は我と偕に食せん」と云ふなり弟子は今まで彼が語る言を聞きてもイ
 エスなることを悟り得ざりしに今麵包を擧ぐ小事によりて之を悟り得たり麵包
 を擧ぐ其手に彼が經にし苦難の創痕を留めしならんか或は擧る麵包を擧る其手
 振りにて思ひ當りしと見ること實に近からん鎖未なる小事往々綿々たる追懷を

惹き起すの緒となる。一縷の輕香端なく有りし昔の花園や塵に歸せし人を懐ひ起さしむることあり。青き花紐の一片を見て恍然として過ぎ去りし私の生涯に立ち返り之に伴ふ一場の畫圖を活現せしむ之に類せる機微に觸れて弟子は初めてキリストなるを知りぬ。之を知りて後は彼は留まりて猶も光を分つことをせず。忽焉として消え去れり。何となれば彼等も爲す可きの事あり直に歸りて使徒等に之を報知せざるべからず。

キリストは次に十人の弟子の集り居る處に現はれしなり。但しトマスは席に在らざりき。彼等は猶太人を恐れて戸を閉し坐し居たるが忽ち一絲の空氣に浮びてイエスの姿は現れたり。彼等は驚愕して幽靈ならんと思たり。人には靈界を怖るゝの心あるを不思議なる。靈界の事とし云へば人間の敵たる地位にある如く感ずる心茲にて明に現れたり。キリストは彼等の疑心を霧らさんとて先づ彼の膝に觸れて其靈にあらすして従前の我なることを驗せしめたり。斯くせずとも彼等はイエスを認むべき筈なるに生時に遺したる約束は斯く僅の間に忘失せらるべきか。然れ

どもイエスは敢て之を責めず。勉めて其疑案を満足せしめんとせり。彼等はキリストを煩はすを待たずして直に彼を見得たれば更に良かりしならん。幼時より死に至るまで間斷なく其知を以て其意志を以てキリストに敬事し得る人は最も幸なり。然れども此種の人には多からざれば、其然る能はざる人の爲にキリストは正當に要求し得る限りの證據を許與するなり。

以上四回の顯現は復活の當日にありしことなるが第五回は其翌日にありたり。この日も弟子は集り居り、トマスも亦ありき。既に記せし如くトマスは懷疑者なりき。然れども一種異風なる懷疑者にてありき。彼は知識的には満足せざる間にも之が爲に愛を移すことなし。借に此席に在りし事により其信義を見る可し。嘗てイエスがラザロの死を聞き猶太人の危難を冒して往かんとせし時、トマスはイエスの身を危きを恐れ、我等も往きて彼と俱に死ぬべしと言ひしが、彼が氣遣ひし如くイエスは死せり。然かも想ひ及びしよりも甚だしき悲惨なる死を遂げたり。其時創口の裂けて鮮血の淋漓たる状をばトマスは目のあたりに見るが如く記憶せしならん。故

基 督 傳

にイエスは其記憶に訴へ其手其脊に觸れしめて存分に眞否を驗することを許したり。トマスは之に應ずるまでもなくして翻然として節を折り我主よ我神よと云へり。暫く彼の精神を萎靡せしめたる懷疑の心取り去られ本來の信念大にして強固なりしことは茲に現はれて斷然キリストの神たることを承認したり。マグダラのマリヤの夫子と云ひしに比すれば大なる進歩なり。

其次はガリラヤ湖上にて弟子に現はれたり。其場に在りし者の中五人までは名を挙げありて其外に猶數人ありき。此時キリストとシモン、ペテロとの間に轉た人を動かすべき問答あり。之れより先きペテロは既に一回イエスに見えしことあり。其時は他の人は席にあらず。ペテロが罪を謝して再び救主に歸りしときなり。想ふにペテロは是の如き會合の機を得んことを期望すること如何に切なりしか。ペテロの氣質によりて知らるべし。彼は向に過つてキリストを知らずと云ひしより心安んせず。されどかくまで不義を加へし其救主は既に死したれば、其前に罪を謝するの機會復あるべからずと思へば、心中の苦悶果して如何なりけん。然るに思ひきや

基 督 傳

其機會は與へられぬ、其席に於て懺悔切なる心情の發露、慈愛深き救主の規戒、此等は外人に漏すには神聖に過ぎたる事なれば、聖書に於てこの會合のありしとは明記せらるれを其詳細は載せられず。ペテロは既に個人として救主に歸りたり。之に加へて使徒たる位置に復ることを許されざるべからず。此はガリラヤ湖上他の弟子の居る處にて公に執行せられぬ。キリストはペテロに三度反覆して「汝我を愛するか」と問ひたり。唯この愛だにあらば可なり。ペテロはキリストの全知に訴へて「主知らざる所なし我汝を愛することは知れり」と答へたり。是に於て一時の頓挫に係はらず。其の精神は諒せられ。ペテロは原の地位に復されたり。キリストの昇天後、ペテロは使徒として如何の舉動を爲したりしか。人の知る所なり。彼が苦難に臨んで忍耐し、争論の間にも靜平を失はず。終に勇ましく教に殉じたることを見れば、彼がこの時嚴に託せられし大任を空くせざりしことを証するに足れり。

キリストは此後ガリラヤ山上に於て十一人に現れ、五百人の兄弟に現はれ、其兄弟ヤコブに現れ、昇天前エルサレムに於て十一人に現れ、最後に昇天の時に現はれぬ。

キリスト顯現の性質を見るに不思議にも遙遠と明瞭深遠と單純とを兼ね有したり。彼の葬られし墳墓は空虚なるを發見せられ、其後意ふまゝに忽ち現れ忽ち消ゆ。人性に属するものは盡く留められて然かも總ての事靈化せらる。或る懷疑家は雙關論を提出して「若しイエスにして復活後も肉体を有し或は食ひ或は手に執ることを得るならば消ゆることを得ざる道理あり。又若し消ゆることおらば其肉体はあらざらん、二者其一に居らざるべからず」と然れどもこの兩面を併せ存する所こそ復活後の顯現の眼目なれ彼が一度死を經過したる爲に喪ふ所は毫も之なく、唯現世の事物に免れ難き制限を撤せられたるのみ。

傳 督 基

一、彼の體に就きて聖書の記する所を考ふるに、十字架に懸りし躰と復活して榮光に入りし躰と相連關せりと見ゆ。復活後の身にも創の痕を留めたり。少くとも此一事は兩者に相通じたり。之によりて知る、キリストは永遠に一個の人たるを失はず。彼の創痕は天上に於ても語り又人の爲に辯す可きを彼の人民の受くる審判は

傳 督 基

又救主の受くる審判なり。

かく相連關すれども靈躰は肉体の如く拘束を受けず。彼は新しき状態に入りたり。彼が實在せる實證を示すときにも物質の限界を受けざることを示せり。彼は現世の生活に於ては動止の常則を離れたること至つて稀なりき。然るに復活後は一處より他處に移るに其間を通過するど見えず。閉ぢたる戸内にも入り來り、食ふことはあれども食物を必要とするど見えず。之によりて證せらるゝは是の如き靈體のあり得べきことなり。この状態に在りては他人より認知せられ得べく又他人を認知し得べし、其身体は精神の助となるも障害となり重荷とならざる状態あり。

二、且此等の顯現にもイエスが弟子に臨むの道を貫ける常法の現れたる所に着眼すべし。復活は主イエスと弟子との間に新なる生ける關係の開くる端緒あり。主は生きて己を其弟子に示現せり。之によりて弟子が知るを要するは第一はキリストが實に甦りたることなり。キリストは弟子を扶掖して漸々に地上の關係を蟬脱し、

傳 督 基

之なくとも可なる境遇に進歩せしめんとす。此目的を證す可き事實は少なからず。四十日の間教會外の人に現れ又交通したること全くなし。彼が言づれたるは其弟子に限られたり。就中特別なる需要を有せる者に現れたり。故にペテロには先づ獨り在る時に、其次に他人の前に現れ、マグダラのマリヤとトマスに現れぬ。深情と規戒と常に相和して含められ、毎回其時に應じて斬然たる特質を發揮せり。然かも歸する處は悉く同一にして、即ち新しき力と新しき信仰を付與するにあらざるなし。又彼は一人に現れ、二三人に現れ又屢々多數の集會に現れたり。然れども少數の者を忘れざる約束は渝らず。曰く「我が名の爲に二三人の集まる處には我も其中に在るべし。」若し二人心を合せて願ふことあらば天に在す父は汝等の爲に之を成し給ふべし。」又キリストの兒輩の充ち足りたる幸福は他の物はなくともキリスト自身あれば足れりとする心情是に於て明かり。

傳 督 基

キリスト十字架に死する後も我等の爲に捧げたる祈禱によりて、彼が永久に中保者たることを知るべきが、この四十日間の事を見れば、彼が其民と偕に現存して限なく其慰藉となり生命となる其方法の意義深き實例を遺したるを知るべし。復活てふ思想の神より出でざるべからざるとは多言するの必要なし。偏したる唯物論と偏したる唯心論の中間にありて兩者の眞理を總合したるこの思想、弟子等が引照すべき先例を有せず、今日に於ても人の最も困難なる不可思議なりとするこの思想は事實以外の臆定を以ては説明する能はず。この思想は固より不可思議にして困難なりと雖も糾紛せる人生の問題に接著して其矛盾を和解すべきは唯この思想あるのみ。

第二十二章 基督の昇天

爾は高き處に昇りたり

基 督 傳

予は既に書を重ねてキリストが如何にして世に來り如何に世に處し如何に死して墓中より復活したるかを叙説せり復活したるキリスト今や世を去らんとするに臨み如何にせば能く其生其死と相添ふて終を完くすべきか其道唯一あり即ち天に昇ることなり聖書には昇天に關する記事短くキリストの傳を記すものも僅々數行を以て叙し去る者多し然れども多くの重大なる真理此の事實に包含せらる。

死以外の門によりて他界に入りたる者はキリストを以て嚆矢とせず舊約書を見ればエノクは死せずして天に移されエリアは火の車に迎へられて天の故郷に歸



りたり然れども此二人の事跡はキリストの昇天と大に異なる所あり此異なる所にキリストの神聖は顯はれたり。

イエスキリストは自己の力と自己の意志に因りて昇天せり故に「我れ我が父に行く」我れ世を離れて父に行かん」と云ひしなり固よりキリストの自力に併せて働ける天父の力ありしとは疑を容れず故に「彼は手を舉げて彼等を祝する時彼等より離たれ天に擧げられたり」と記されたり然れども彼自ら天に昇りたりとの思想を以て根本とすこの處エノク、エリアとは明に差別あり舊約書によればエノクは靜に神と偕に歩みしが一日神の手に導かれて罪の亂多きこの世より擧げられたり然らばエノクは自ら昇りしにあらすして神之を携へたるありエリアは又大風に駕して天に取られたり彼自ら往くの時と方法を定めしにあらす一生の事業既に終り彼に縁りて成さるゝ神意の達せし時神は火の車を送りて彼を迎へたるにて其時其方法どもに神の裁定する所なり彼が火の車に駕し火の馬に轆かれ炎の道を追うて天に昇りしは烈火の如き其氣象に適合せりと謂ふべし當日の光景の

傳 督 基

倏忽にして力を用ふること多かりしは塵世の血肉を天に擧ぐるの困難の現はれたるありと或人の云ひしは奇抜なる着想と云ふべけれ預言者を天に擧ぐるには力を費すことの大かりしに反して、キリストの昇天は至て静穩容易ありき彼の生や柔和にして其死や從容たりし如く、其世を去りて榮光に入るや又音なく奇觀なかりき彼は弟子に別を告げて天に去れり弟子はキリストの空に昇り行くを見或は遠ざかり行く其影の下なる草原に映るを見しならん遂に雲の中に入りて姿は見ゆすなりぬ彼は神なりし故に天に昇るは世に降りしよりも自然の事なり下降するは人には自然にして容易なり上昇するは神の事なり故に自己の意志に隨ひ自己の本性の法規に應じて天上に昇りたるあり。

又キリストが他の人と異なる所は完結せる事業を遺して去りし事なり彼は世界の罪の爲に死して十分なる犠牲を供へたれば此上何人も之に加ふるを須ひず神獨り能く完成す人は能はず。ラスキン曰く「人間の工作は精巧瑕なしと見ゆることも到底粗笨にして缺多きを免れず。人は琢き削り苦心自ら病むに至る然れども技神

傳 督 基

に入るの絶品と雖ども顕微鏡下に置きて之れを觀よ繊細見るべからざる毫端は鏤崗の如く絹絲は帆綱の如く平滑なる表面は岩石亂立せる砂漠の如し人間種族の有らゆる技藝と巧知を盡して精妙の臻り得べき限りを究むるとも蠅の脚に於て泡沫の薄皮に於て成されある所を成す能はず事を完成し得るは唯神あるのみ人心の智能明になるに隨ひて人工と神工の距離無限なるを觀すること益々明瞭あるべし。エリアは死後に於て繼續せらるゝを待てる事業を留めたり彼は世を去る前三の預言者學校を訪ひ他日己の事業を紹介すべき後進の少年が律法の卷を學ぶを見て去れりと云ふ我等皆エリアと同じく事業を後人に託して死す先哲其の愛する門人に遺言して曰へり汝は今より我多年推し立てたる其旗を擁して進軍し凱旋の日には我が墳墓の上にて之を翻すべし汝は我が畢生の問世に入れんとて拮据したる其使命を取りて一層の力量と一層の妙調を以て之を鼓吹し世間が我より受くるを欲せざりしものを汝より受けしめよ。エリアは遺業をエリシアに傳へたり。一の預言者死して他の預言者之を繼ぎ工人は死するとも工事は幾

基督傳

代の歴史に亘りて進行す然れどもキリストの事業は一度成されたるは即ち永遠に成されたるあり凡て爲すべき事として爲されざるはなく言ふべき言として語られざるはなかりき故にキリストの使徒は繼續者を有せりと雖もキリスト自らは繼續者を有せず獨歩の地位を占めたりと謂ふを得べし。

斯く一面の意義に於てはキリストの事業は完成せりと雖も他の方面より云へば昇天後までも事業は遂行せられたり天上の事業は地の事業と差別はあれども本来同一の條系の物にして同一の大目的を成就する爲あり他の人間の恩人とキリストとの間を劃するは此の事なり他人は其親しき者に向つて云ふならん我汝に別る、前に何か爲すべき事ありや我が生くる限り我が生命は汝に與へん最後の息を引くまでも汝のものにして其息は汝を祝福する爲に用ひられん然れども汝の許を去るの日は我が力の終る日なり父母は年猶少く便りなき子を遺して死す死して後は世に遺せる者の爲に何事をも爲す能はざるは死の苦酸あり然るにキリストは隔つる幕の彼方に入りても世界に於て着手したる事業を進捗す新約書

基督傳

に於て特に希伯來書に於ては處々にこの幕の掲げらるゝあり我等はこの裡に眼を注ぐを可しとす十字架を考ふるごと如何に多くとも固より多きに過ぎず然れどもキリストの天の玉座を思ふこと少きに過ぐべきにあらずキリストが世に於て成したる事業は即ち我等の信念の據りて立つ處なるが此事業は昔斷ぬしにあらずして今日までも經營せらるゝ又キリスト人の爲に生を捨つると雖も人の爲に再び之を取にあらずんば人の益をなさず空しく横逆の犠牲となりて己む當に犠牲たるに止まらず兼ねて又祭司となりたればこそ救世主の事業首尾を全ふし得たりキリストは神人の中保者となり人の爲に神に捧ぐる祈禱は泉の如くにして盡くことあらず我等が人の爲に計ること或は續き或は斷ゆ獨り續くことありて斷ゆることなきはキリストの事業なりこの真理に至りては言を以て意を盡すに足らずと雖も若し之に近き言を求むれば斯く言ふを得べけんか仲保者たるキリストは永久に犠牲を神の前に献するが故に之に伴ふて生ずる要求を永久に神の爲に提供すと。

且キリストは天に昇りて我等の往くべき處を準備するなり。彼は前途爾々暗澹たらんとする時に當り狼狽せる弟子を慰めて云へり「我が父の家には住居多し、然らずんば我預め汝等に告ぐべきなり。我は今に至るまで汝等が要する希望を鼓舞して逡巡すること亦かりき。今に於て焉ぞ逡巡せんや。天父の家に於て其れくの處は汝等に與へらるべし。我は之を準備せんとて行くなり。是に至りて我等は只臚にのみ解し得らるゝ事物に觸着す。但神が人間須臾の住家とあるべきこの世界を設備するに數千年を費したるを思へば、神の兒子が永久に安息すべき天地を備ふるには巨多の年代を費すを惜まざりしならん。然れども此等の準備以上の準備はキリストが榮光を被れる人性を以て其の處に親臨するの一事なり。天堂の威儀嚴にして光輝燦然たり。若し其の中に我等の兄弟なるキリストを見るにあらざんば、人如何にして其處に安んせんや。昔しヨセフの兄弟はアラビヤの野にて生長せし牧夫なる故、常ならば世界にて最も權勢に傲れる埃及の王廷に居り難く感ず可きに、其然らざるを得しは偏に兄弟ヨセフが其處にて大官となれる故なり。之と同じく

イエス、キリストの天に現在するにあらざんば我等は天を我が家とする能はざらん。我等天てふ思想を整理せんとすれば、夙くも種々なる不一致と紛亂の爲に途を阻する。然れども到底之を外にする能はざる思想にして我等が依て安する一思想はキリスト即ち天にして天即ちキリストなりとの思想あり。彼處の生命につき我が知る所は徹にして信仰の眼は眩ひなり。然れどもキリスト總ての事を知るてふことにて十分なり。我キリストと偕にをらん

世を去るはキリストと偕に在るとなり。この單純ある一思想は紛々たる千百の思想よりも優れること遠し。我等が天に入ることを得るも、又天の恵福を享有するを得るも一にキリスト彼處に在す故なり。天使は其罪逆によりて光明の郷より最下の暗黒界に落とされぬ。我等人として幸に救ひ上らるゝ所以は、天使よりも聖きが爲め、或は力あるが爲にあらす。唯天使はキリストに結合せざりしに我等はキリストに結合したる故なり。キ

第三十二章 基督の昇天 三百四
リストに連結し得たればこそ人生の荆棘を分けて安息の天に身を置き得るなれ。キリストの在る處に我等も在り、キリスト天を去ることあらば我等も彼に扈して去らんのみ。

エリシアは天に昇らんとするエリシアに向ひて、天に行けば其力を用ひて我が爲に闘る所あれと請はざりき。天に於て我が爲に祈れと云はず、又天より我事業を覽て之を助けよと云はず、但云ふ、汝此世を去るに先だち我が世に留まる間我を裨益すべきものを遺せよと。昔英國の監督リドレー教の爲に殉せんとしてブラドフォルド(この人も亦後日殉教せり)を顧みて云ひけるは、汝が旅路に在りて想ふ間、我は神の恩恵に依りて天父に願ひ汝が安全に家郷に着し得んことを求むべし。然して善き兄弟よ、汝は又世に残りてキリストの爲に困む者の爲に語り又祈れよ。此は多少生者と死者の間の契縁を思想したれども、猶漠然たる渴仰希望臆測に止まれり。キリストが恒久に人の爲に働くとの確知は之に比して如何に明瞭にして堅固なりしぞ。

この思想と表裏すべき思想は、キリストが現在此世界の裡にて活動しつゝありとの思想是れなり。彼は一度天に昇りたりと雖も、復地に下り合戦の矢先に出入して士卒と共に闘ひて勝を取らしむるなり。彼は天上の幕に隠れて人の爲に意を用ふるに止まらず、曰く「見よ、我世の終まで汝等と俱に在るなり」と。彼は天に在りて神の右に位を占むと雖も、又熄む時なきこの世の戦闘の場を曠くせず。常に教會全体の爲に戦ふのみならず、一個々々と俱に運動す。キリストは我等の一身に特殊なる戦に於て又特殊なる重荷につきて我等を扶助す。人若し悲哀の大なるが爲に信仰の消耗せんとすることあるか、彼は其磐石を轉じ去りて光明を透射せしめん。若し誘惑と腐蝕の多きに堪へざらんか、彼は其力に壓倒せられざる中に應援を興ふべし。若し微力ある教會の一隊が衆寡敵し難き勁敵に對して陣を収むるの色あるとき、キリストは昔神の騎兵が戦危き時に現れて羅馬兵を援けたる如く陣頭に顯れて勝敗の機を轉すべし。彼れは將となる前士卒に伍して戦ひたれば悉く兵士の困苦を味ひ知れり。殊にキリストは靈を人に付與して人と俱に在り死せんとする首領

にして其靈を身後に遺し得るはキリストあるのみ。エリシヤはエリアに乞ふて曰く「汝の魂二倍となりて我が身に留まらしめよ」。エリア答へて曰く「汝は求むる所甚だ難し。求むる如くあり得べきか。將たあり得ざるかは我云ひ得る限にわらず。唯神意の儘なり。汝若し我が取られて汝を離るゝを見ばこの事汝に成らん。然らずばこの事汝に成らじ。賜物は全く神に属す」。首領たる者死に臨んで己が靈の他人に宿らんことを祈れども、自ら其靈を注ぎ與ふる能はず。獨りキリストは其靈を與ふることを好み又之を與へ得る事に於て他の人と異なり。

キリストの名が世界に強大なる力を有するは之あるが爲あり。他人の聲名は衰ふ。獨り彼の聲名は益々揚る人は昇る旭日を拜すれども、其の聲名の次第に消失するは常の數なり。其占めたる地位は他人の代る所となり。其事業も亦他人襲うて之を取る。世の追憶は年と共に薄らぎ行き断れどなる。固より人の遺業は永く傳はりて其勢力の認むるに足るものあるべし。雖も時は人と次第に相遠さかり、餘澤は残ると雖も人格は漸次に臙になり行くなり。大人の名を世に留め置かんが爲に

百年期を祝し其他の紀念の道を立てんとして空しく勞するは何となく哀れを感じせしむ。然るに他人の名の光明を奪ひ去る年月が獨りキリストの名には新光華を加ふ。彼の名は太陽の如く限なく現存し又照り輝けり。彼の事業恒久なればなり。我等は死せる人の事業の餘澤を被る。然れども昔力の出でし中心より復新に力の發することばわらず。其人格は事業に没して存するを得。然れども人類の歴史に及ぶキリストの感化は若々として窮無き世に加へらる。彼の人格が現在世に活動せる人物の孰れよりも猶新鮮燦爛たるは之が爲なり。

キリストの昇天は人の爲に天に行く道を指示す。光明の足跡は暗黒を貫きて直に天の中心に續く。彼の行きし如く我等も亦行かん。エリア天に昇りたりと雖も之が爲にエリシヤの爲に道は明を加ふるとなかりき。エリシヤはエリアに隨ふてギルガルよりベテルに行きエリコに行きヨルダン河に行けり。然れども之より先には伴ふ能はず。第二の旅程の如何を知るは死にたる後まで待たざるべからず。死の深

秘の暗きことは依然たり須臾の光は早く消えて又忘れらる。この間に在りてキリストの昇天のみは人の靈魂も亦天に昇るべき擔保なり最後の息は引かれ耳目に閉づる時我等は知る形體は冷くなると雖も靈魂天に昇り幾千年を隔てたる如く遠く所を異にするをキリストの臣民が樂園に通ひ得る道はキリストが執りしと同じ道なり。

キリストは天に昇りたり復てこの世に臨む時あるべし。猶太人は救主出現の大時代の前にはエリア世に返るべしと望みたれどもこの預言は蓋し十分に成就せられざりき我等はエリアの再來を待たずキリストの再來の時には聖徒聖天使も俱に來るべく義人は日の如く輝くべしと雖も此等の事は多數の人は大事と思はず其觀念明あらざれば之が其一生を動かすべき動機となることもあらざらん。獨りキリストの再來てふ一事全く異なり教會の希望は之に係かれり教會は今も東天を仰ぎて此の日を俟てるなり。この望なくんば信仰と力は地に墮つべし。キリストは王國を授けられ其國を治めんために行きしが復爰に歸るべし。縱し其日は遅々と

して到らず多くの人は疑惑し一代去りて一代來ると雖も我等は知る天開けて王位は設けられ主其處に出現すべきをアメン來れ是の如くあれ主イエスよ。

第二十三章 基督の品性

言を以て人の子に背く者は救さるべし

傳 督 基

汝等キリストに就きて如何に思ふ乎、キリストの此の質問に對し我等は彼の品性に
 つきて何を言ふべきか。彼は人類の籍に屬し、身は猶太の一人より生れたり、
 雖も普天の民皆骨肉の如く彼を眷愛す。此宇宙的的人物に關して今如何なる判断を
 下すべきか。第一に彼自ら稱號する所に隨へば罪なき人にてありき。萬人の前に立
 ちて汝等の中誰か我が罪を定むる者あるかと問ひ、更に歩を進め、天父の前に出で
 ては、我は常に爾の意を擇ばず事を爲せりと陳べたり。古往今來一人として此の告
 白に對して反証を擧げ得る者あらず、友人も局外者も敵にてありし者も齊しく、
 スカリオラのユダ、ピラト、十字架上の盜賊百夫の長の承認する所悉く一に出づ。今

傳 督 基

假に一步を譲りて此等の記事は味方の筆に成りし者なるが故に多少偏頗の見を
 脱する能はざると、福音書記者の傳するところ全くは信を措くに足らずとするも、
 猶茲に破り難き一の事實を餘せり。即ち假にもあれ真にもあれ福音書の記者が一
 個人の人格を描き來りて精細活くるが如くなれども猶一點の瑕なく之を寫し得た
 ることなり。哲學思想の路も細目に入るときは必ず錯誤を雜へざるを得ざる如く、
 人物の描寫細に入る間には多少の破綻は免かれ難しとす。キリスト一生の事跡は
 古來縦横に點檢せられ、道徳上の曲所を衝かんと試みたる者多し。彼が無花果を呪
 ひて之を枯したる事、豚の群を死せしめたる事、商估を神殿より驅除したる事、カナ
 の婚筵に於て母に對して稜角ある言語を用ひたる事、政治上の義務と宗教上の義
 務との不兩立を教へたる事等は、材料として擧げられたり。我等は之に答ふるに若
 し果して罪惡あらば其徵候は是の如き末節にのみ顯はれて已むべきにあらずと
 の一言を以て足れりとす。況んや此等の各條に就き逐次に審査し來れば以上の非
 難は悉く倒れて、明鏡の面に一抹の曇をも點し得ざるに於てをや。我等は敵の寛待

傳 督 基

を期せずして猶ほ平心にキリストの挑言を反復することを爲す「汝等の中に誰か我が罪を定むる者ある乎」とこの點に於て批難の聲は寂として熄みぬ彼等の議論は或る根本的事實を閑却し或る根據なき假定の上に築きたること明にありたればなり昔の猶太人と同じく彼等この質問に對して黙するの外なし。

之より更に力あるは彼自ら罪なきことを立證したる言なり凡そ徳性の進歩は次第に全面に浸透すべきものにして其一部に欠所あるを注意し得ざるは畢竟靈眼の未だ運鈍あるが故あり神の僕にして最も偉大なる最も聖境に進みたる人は自ら謙抑して己の罪を告白し「我は清からざる唇の人なり」と云ひ、「噫我困める人なる哉」との嘆を發したり舊約の詩篇を讀むに其雍容たる大曲の裡不思議にも懺悔の哀音を帶ふ獨りキリストの長き對話にも又獨語にも懺悔の嘆聲は半句も之を雜へず然して彼は驕れるパリサイ人におらずしてパリサイ人を叱責したる人あり税吏罪人の友にして罪を告白する人を愛好せり然るに彼等と同一の唇には降らず朗なる信依の眸を天に擧げて爾の我に賜ひし事は我之を成せり」と云ふスト

傳 督 基

ラウスさへもイエスは宗教の領域に於ては詩界に於けるセキスピヤーと同じく軍事に於けるアレキサンドルと同じく他人之に達すれども越ゆるを許されざる界線の内にありと許したりかはどなる人の目には只一纖塵も恐ろしき汚點と見ゆべきにキリストは自ら汚點あるを認めず彼は悔改を要する人のため感ずると痛切なれども自ら悔い改むべきを見ず彼は罪を感ず然れども罪人として之を感ずるにあらずして罪人の罪を負担する人として之を感ず「人の子に逆ふ言を吐く者は猶赦さるべし」との一言は身に蝟り來る矢石の上に超然たるの概あるにあらずや又彼が人の審判者たるを以て自ら居る名分は自己の無罪なることを包含すこの名分は相對的にあらずして絶對的なりこの點に於ては他人の參畫を許さず天使さへも只從者の地位に置かる「罰せらるべき者よ我を離れて熄えざる火に入れよ」との言は罪ある人の口より出で得べきか又彼は罪人の爲に死するを分とす絶對的に罪なき人におらずんば如何ぞこの言を發し得んや汚れたる生命を以て汚れたる生命に代りて犠牲となり得べきか故に審判者たり代贖者たる名分

は罪なきことを前定したる上にてあらざるべからず。

二、キリストの品格は積極的なる善と消極的なる善を併せ有せり。彼が罪なきこと云ふ中には神と人との對する愛に溢れ、この完全なる愛が完全に發露したる事を含めり。想像の力を假りて完全なる人格を描く事の難きは之を積極的ならしむるの難きにあり。短所を難ふることを避くるは比較的容易なり。但容易ならざるは徳を表するにあり。キリストの品性は欠點無し。然かも人の想像に成れる只無難なる人に肖すして積極的の性質と新鮮と力量に充ちたり。

三、其美質互に均衡を保ち圓滿に整へることも彼の特色あり。大徳は往々不徳に肖たる所ありて能く均衡を失はざるは得易からず。威嚴は驕慢に流れ易く、深慮は冷情に流れ易く、眞摯は粗硬に流れ易く、禮讓は虚文に流れ易し。兎角有限なる人性は一方に傾注すれば他を虚くするの恐あり。然れどもキリストに於てはこの偏長な

傳 督 基

傳 督 基

く、渾然として微瑕なき品質を具ふ例へば彼が寛嚴の中正を得たる一事に注意せよ。彼の如く猛烈なる勢を以て惡を責めたる人あらず。彼が生れたる時代は淫奔ある、姦惡なる横邪なる時代なりしなり。然れども彼は之どもに深き優しき情緒に富みたり。非運定まるエルサレムを望みては涙を流し、訴人の前に淫婦を庇護し、涙を以て彼の足を濡したる婦人の罪を赦したり。又彼が男子的性格と婦人的性格とを兼ねて均衡を失はざりし事に注意す可し。デオード、ステワルドの言に多少の眞理あり。曰く「我等が今日男子的なりと稱する性格は正則なる模型のものにあらず。我等は蠻風と戦ふべきこと多く之が爲には勇氣堅忍を必要とせしより、此等の性格をば男子の特質と考ふるに至りしも、其實此等は墮落後の男子の特質なり。」キリストの品格は人を牽着するの力あり。彼が人の愛情を牽き又艱難を忍受するの力は女性的なり。而して聊も弱き所あらず。

四、彼の品性は至つて單純なり。人を驚かし眩惑せんと試みず。彼は天才に伴ひ易き

第二十三章 基督の品性 三百十六
奇矯を有せず、其生活の風、其衣服、其動作に矯飾の痕跡を留めず。其生涯は一品を以て作らるゝ如く、最も驚異すべき事件にて、又最も平凡なる事件なり。或は奇跡を行ひ、或は食事を爲し、或は不朽なるべき譬喩を語る。時に隨ひ事に應じて時々刻々、靜平ある生活を送るのみ。單純は偉大の特色なり。キリストの如く單純なる人曾て世に有らず。

五、彼は今迄世に重んぜられざりし徳に重きを置けり。力即ち徳なりとして尙まれたりし時代に生れて、受働的の徳を説き大に忍ぶは大に行ふに比して劣らざることを説けり。ペテロはキリストの例に倣ふことを勧むるに當り、この點に重きを置きて曰く、「彼訴らず苦められて厲しき言を出ださず、但義を以て鞠く彼に之を託したり」と。忍耐、謙遜、柔和の徳、久しく世に忘れられしがキリスト之を正當の位置に回したり。我等は如何なる徳を擧んでキリストの特性なりとすべきかを知らず。彼には總ての徳に於て齊しく卓越し且圓滿に調和したればなり。但彼が重を置きしは

以上の諸徳にありしを注意し得べきのみ。

キリストは模範を世に貽したり。「如何なる時如何なる處に在ても謹んで汝の心の眼前にキリストを置くべし。彼が弟子と偕に在る時罪人と偕に在る時彼が語る時彼が説教する時彼が行く時彼が座する時彼が眠る時彼が醒むる時彼が食ふ時彼が人の爲にする時彼が病人を癒やす時其他の奇跡を行ふ時の舉動と作法を思ふべし。又彼が人に對して如何に謙遜なりしか、弟子の間に在りては如何に深切なりしか、貧民に對するや如何に慈悲深く彼等と同様の境遇に下りて一家族の如く彼等と遇したりしか、如何に人を賤ます人を斥けず、癩病人にさへ然かせざりしか、如何に富者に媚びざりしか、如何に世俗の煩慮と肉体の需用の爲に心を拘束せられざりしか、辱めらるゝ時如何に忍びしか、人に答ふるに如何に柔和なりしか、彼は鋭く苦き言を弄して勝を取るを欲せず、柔和謙讓の答によりて他人の惡意を隣することを欲したればなり、其舉動如何に沈着なりしか、人の靈魂の爲に憂ふること如

何に深かりしか(人を愛する爲に死をだに辞せざりし)如何に彼が萬般の善の模表として己を掲げたりしか(苦める者には如何に情を注ぎたりしか)如何に弱き者の至らざる事を酌量せしか(如何に成功を輕せざりしか)如何に悔ゆる者を迎へしか(如何に父母に義務を盡せしか)人の爲に計ること如何に敏かりしか(自ら曰く我は汝等の中にありて事ふる者の如し)如何に外觀の美奇異の行を避けたりしか(如何に人を躓かすことを避けたりしか)其飲食に於て如何に節制せしか(其容貌如何に和平なりしか)其祈禱如何に熱心なりしか(如何に着實に自ら警守したりしか)勞役欠乏に處して如何に忍耐したりしか(万般の事に於て如何に平和坦懐なりしか)此等の事を熱々汝の心に置きて之に倣ふ可し(ルドルフスト、サキソニアの言にしてコオルリヂ及びチヨルチの引用する所あり)

摸範たるキリストは是の如し。若し夫れキリストにして完全なる摸範、人類の理想、宇宙の華又冠冕として仰がるゝに至らば、既に神異の領分に履み入りしものなり。何となれば罪なき人あるは既に自然の順序の破れたるなり。且キリストの品性に

は明に神ある要素あるが故に雷之に倣ふに止まらずして之を拜せずんば已まざらしむ。彼は單に完全なる人たるに止まらず、我等がパウロを論ずる如く分析して之を論ずること能はず。パウロとキリストとの距離は或は我等とパウロの間の距離よりは近しと思はるれども、然かもパウロよりキリストに至る間には測るべからざる距離あり。最大なる使徒を取りてキリストに比する時にも、我等は「我が主よ我が神よ」と呼ばざるを得ざらしむ。

キリストに親炙せる人の受けし感觸之を罪無しと云ふのみにて盡すべくもあらぬ。人格より生ずる感觸は、我等が項を分ちて彼の徳を分析する時に、其眞に然りしを知る。彼は通常一樣なる人情を表章せず。彼は少しも自己の事を心頭に置かず。彼に利己心なし。彼は自ら辨ずるを求めず。彼が暴風怒濤の中にて目を醒ます時、恐怖の情を漏らさず、不正なる法官の前に立ちても人の發し易き憤怒の言を吐かず。人を彼を石にて打たんとする時、之を避けたれども、懦夫の如く神殿の柱の後に縮みしにあらす。人間以上の權力を帯び神の威光を以て敵人の間を通過したり。彼が自ら

基督傳

我は心柔和にして謙る者なりと云ひしは全く疲れたる罪の重荷を負へる靈を招誘するの根據を語りし者なり彼は人の寵遇を求めず又人彼に来るが爲に之を徳とせず彼は自己の王たること救主たること奇跡の力を有することを自覺す然れども我等の所謂自尊心なるものを有せず渾て是れ力なり自矜にあらす此れ即ち神の思想にあらすや終に臨みて我等は開卷の問題に復らんとす彼果して何處より來りしか如何に彼を説明せんとするかイエスキリスト其人は解釋せられざるべからず彼は特に當代の問題にして又万代の問題ありキリストに就きて如何の解釋が能く成立し得べきか彼は夢想によりて作り出だされし人物なるか然らば之を夢みたる者は夢裡の人と匹しき大人物ならざるべからずこの答を與へたる人は猶更に解釋せざるべからず人の想像の産物なる此人が如何にして人間歴史の第一位を占むる者となり今日に至りて幾百万の生活と其運命を支配するに至りしかを驚くべきはキリストが異なりたる時代を貫きて不變の標準となりしことなり各時代の最も善なる思想は彼の裡に包蓄せられたり初には大預

基督傳

言者人類の教師として觀られ次には献身せる貧窮の生活の理想と仰がれ次には大宗教家として次に人生の模範として觀られたり皆眞の觀念なれども一として全き者あらず各時代は各彼に感觸し彼に指揮せられたり然れども彼は依然として時代の先にあり又時代以上にあり進んで至る處にキリストありて人の最も善き思想と希望に照應す今に至るまで斯く有りし如く後亦然らんこの模表は殊に人間の最大なる思想の上に卓立し又この模表につきて人の言ひ又思ひ得たる最大なる事物の上に卓立す世界は代を繋ねて大なる進歩を爲すべく前人の未だ思ひ及ばざりし物を發見するならん然れども其進歩は如何に大なるとも人類の行路を指導する者は依然として斯の人ならん

基督傳終

20/2/36

明治三十四年十二月廿一日印刷
同三十四年十二月廿四日發行

定價上製壹
全並製七十錢

複製
不許

譯者

柏井園

發行者

東京市京橋區采女町廿四番地
福永文之助

印刷者

橫濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

發行所

東京市京橋區采女町廿四番地
警醒社書店
電話 新橋一五八七

印刷所

橫濱市山下町八十一番地
福音印刷合資會社

賣捌所

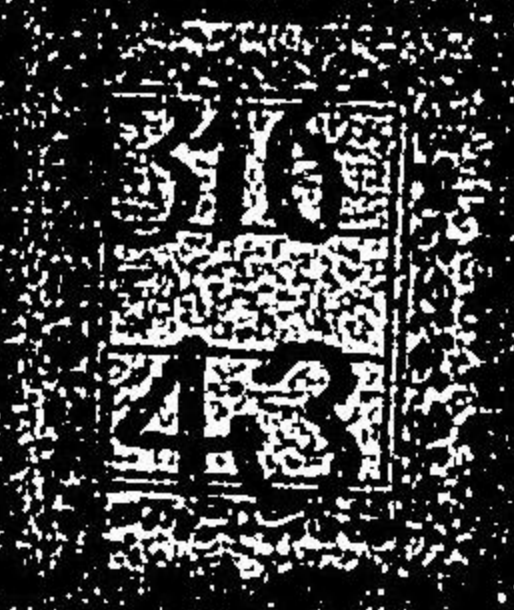
東京神田區猿樂町二十五番地 中庸堂
京都三條通 聖書房
大坂四區新町通四丁目 福音社
神戶元町通 福音舍
札幌南一條 富貴堂
四丁目 福音舍
札幌南一條 富貴堂
信州上田原町 百合舍
其他全國各書店

316

43

11111

11111



020551-000-1

316-43

基督伝

ロボルトソン・ニコル/著

M34

ABI-0364



